ブラジリアン・ハイキック　～天使の縦蹴り～

須藤彦壱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ブラジリアン・ハイキック　～天使の縦蹴り～

【Ｎコード】
Ｎ２２８８Ｙ

【作者名】
須藤彦壱

【あらすじ】
拠所ない事情でやったこともない空手道場に入門したボク、三浦亮太。そこで出会ったのは同級生の栗原玲央。どこか翳のある彼女と友だちになれたのはいいけど、ボクにはそんなことで浮かれている余裕はなかった。ある事情があって、ボクは今すぐにでも強くなる必要があるのだ――

『この小説は筆者の別サイトから改稿・転載したものです』

1. 出会い

「……えーっと、じゃ、ここに名前と住所書いて。それと、ここん〈男子〉ってところにマルね」

応対に出た三〇歳位の男の人はそう言って、ボールペンの尻で入会申込書の性別の欄を指した。

空手の師範代よりは塾の先生のほうが似合いそうな線の細い、正直言って頼りなさそうな顔立ち。おまけにボソボソ声で何を言ってるのか、ものすごく聞き取りにくい。道着姿なのにまったく強そうに見えないこの人を師範代と呼ぶのはちょっと――いや、かなり躊躇われる。

名前を書こうにも、ペンはこの人の手の中にしかなかった。仕方ないので自分のペンを出して、言われたところに自分の名前を書いた。

「三浦亮太（みうらりょうた）くん、か。よか名前やねぇ」

「……どうも」

ペコリと頭を下げた。他になんと言えばいいんだろう。

香椎（かしい）のど真ん中にある雑居ビルの二階にある空手道場。だから、そんなに広くはない。こういうところのお約束どおりに天井からはサンドバッグが、壁には額縁に入った賞状、やけに達筆な字で〈鍛錬〉と書かれた掛け軸なんかがこれ見よがしに掛けてある。

奥に更衣室と倉庫はあるようだけど他に部屋はなくて、ボクと師範代は隅っこの畳が敷いてあるスペースで、卓袱台のような小さなテーブルを挟んで向かい合っていた。一応は胸くらい高さの衝立で囲われているので、ここが事務室ということらしい。

師範代はボクの「入会したいんですけど……」という声に、ちょっと薄気味悪いくらいにこやかに応対してくれた。

理由は足を踏み入れて三分以内に想像がついた。
言っちゃ悪いけど、この道場には活気というものがまるで感じられなかった。寂れているというほどひどくはないし、設備だって古ぼけてはいないのだけれど、そこにある何もかもがちょっとずつ煤けた感じに見える。その証拠に道場生の名札を掛けるフックにはずいぶん空きが目立っている。祭日の昼下がりなせいもあるかもしれないけど、道場で練習している人は一人もいなかった。
ひょっとして道場選びを間違ったか？
そう思ったけれど、だからといって他に選択肢はなかった。ボクが通っている塾がここのすぐ近くにあるからだ。塾通いはちゃんと続けるというのが道場通いをオーケーしてくれる条件である以上、あまり離れていては都合が悪い。
学校が終わって家に帰る。着替えて西鉄の三苫駅（みとまえき）から宮地岳線（みやじだけ）に乗る。香椎に着いて塾へ。受ける授業にもよるけど終わるのは早くても七時か八時。それから家に帰って違う方面にある道場に行くのは時間のロスがありすぎる。それに三苫・香椎間の定期券は塾用のがあるけど、それとは別に定期を買ってもらうのはさすがに気が引けた。仕事と接待に明け暮れる――ホントかどうか知らないけど――父親に送り迎えを頼むのはもっと気が引ける。
そういうわけで、香椎以外の場所は都合が悪かったのだ。
まぁ、空手初心者――というより運動初心者――のボクにとっては、みんながバリバリにやっているところで相手にされなかったり場違いな雰囲気に顔を伏せたくなるよりは、ちゃんと指導者がついて一から教えてくれるところのほうがいいに違いない。ちょっと無理があるような気がするけど、そう自分を納得させることにした。
師範代はそんなボクの思いになどまるで気づく様子もなく、淡々と月謝のことを説明していた。
月謝のことははあらかじめ調べてあったし、ちゃんと用意もしてあった。入会金と二ヵ月分の月謝を入れた封筒を差し出した。師範代はそれが当たり前のような顔をしていたけど、口許が微妙に緩ん

でいるのをボクは見逃さなかった。
「じゃあ、これ。ご両親に承諾書ば書いてもろてきて。それとスポーツ傷害保険の申し込み書も書いてもろうとかんといけんねぇ。脅かすつもりはなかけど格闘技やけん、怪我することもあるしね」
師範代は次々に書類やパンフレットをテーブルに置いて、それを大判の封筒に入れた。
「ありゃ？　領収書の綴りがなかね。ちょっと待っとって」
ブツクサ言いながら向けられた背中はそれなりに大きかった。帯もちゃんと黒だ。道着の裾がほつれて糸が伸びているのが見えなかったら、少しはこの人のことを見直していたかもしれない。
「ここへはどがんやって来ると？　バス？」
年季が入ったキャビネットを引っ掻き回しながら、師範代は言った。
「いえ、西鉄で。家は美和台（みわだい）なんで」
それがどうしたというんだろう？
「君、三年生やろ。やったら栗原って女の子、知っとう？」
「栗原さん……ですか？」
福岡市の中でも東区は団地が多くて、そのせいか、ボクが通う中学校は市内有数のマンモス校だ。ボクらの学年も八クラス、三〇〇人以上もいる。おまけにボクは今年の春に転校してきたばかりだった。
他にもいろいろと拠所ない事情――正直、女の子とはあんまり上手く話せないとか、それ以前に転校生のボクにはそれほど顔見知りがいないとか――もあって、苗字だけで誰かなんて分からなかった。
「栗原、なんていうんですか？」
「玲央（れお）」
……なんだって？
「ひょっとしてその子、背が高くて、髪が短くて、目つきがやたらと鋭い――」
「うん、そがん感じやね。上原多香子に似とらんこともなかかな？」

師範代の喩えをよそ該当する人物の影が脳内スクリーンに像を結んだ。ボクは戦慄を覚えた。
「……そ、それってまさか、ボ――」
「誰がボブ・サップねってッ！？」
唐突な怒鳴り声に続いて、ゴツッという鈍い音と共に目の奥で火花が散った。
「いってえッ！！」
思わず頭を押さえて振り返った。
衝立から身を乗り出して手――と言うか、拳――を伸ばしていたのは、男と間違われるくらいのショートカットの道着姿の女の子だった。面長の整った顔立ちなのは否定しないけど、上原多香子は言い過ぎだ。
「あの……栗原、さん？」
「いまさら遅かって。まったく、そがんことは本人に聞こえんごと言わんね」
「だ、だって、いるなんて知らなかったし……」
「せからし。男の子が言い訳せんよ」
彼女――栗原玲央は憤怒の表情のまま、大股で衝立を回って近づいてきた。
子供の頃は女子のほうが男子より成長が早いとはいうけれど、彼女はいまだに男子から打倒を叫ばれる長身を維持している。おまけにボクは座っているので、余計に見上げるような格好になってしまう。
その強烈な仇名の割に、ボクは彼女のことをほとんど知らなかった。クラスが違うので――ボクは二組、彼女は七組――ろくに話したこともない。知っているのは空手をやっているらしいことと、各運動部の顧問がスカウト合戦を繰り広げたほどスポーツ万能で、しかもその全部を蹴ったという逸話くらいだ。
それともう一つ。学年の中のちょっとワルそうなグループの面々も、彼女にだけは手を出そうとしない。出せばただでは済まないこ

とを知っているからだ。
ボクは友人の杉野から聞かされた、彼女の仇名の由来を思い出した。
元ネタがその長身なのは丸分かりだけれど、空手使いの彼女には別のファイターが充てられてもおかしくなかった。ニコラス・ペタスとかアンディ・フグは格好良すぎても、武蔵とか角田信朗あたりならネタとしても悪くない。
実は彼女が〈ザ・ビースト〉扱いされているのは、デビュー・イヤーにサップがアーネスト・ホーストを圧倒したのと同じように、彼女が入学した最初の年に幅を利かせていた三年生の不良少年たちを瞬殺したからだそうだ。
ちょっかいを出したものの手厳しく撥ねつけられた不良少年が、捨て台詞で言ってはならないことを口にした、というのが彼女が激昂した理由の定説だとボクは聞いている。
不良少年が何を言ったのかは誰も語ろうとしないので、ボクも詳しいことは知らない。杉野がその話をしてくれているときに、たまたま廊下を通りかかった彼女の胸元――お世辞にも豊かとは言えない――を見ていたことと関係あるかどうかも分からない。命が惜しいので確かめたくもない。
「なんや、玲央、おったとや？」
師範代はたった今、自分の背後で起こったことにまったく興味を示していなかった。彼女はこれ見よがしにフンと鼻を鳴らした。
「おったら悪かと？」
「悪うはなかけど。彼、新しか練習生。同じ学校やったら気心も知れとうやろ。仲良うしてやって」
「別に気心とか知れとらんけど……。ま、とりあえず、いたぶり甲斐はありそうねぇ」
「おーい、変なこと言うなって」
「ジョークって。よろしくね、三浦くん」
「……ああ、うん、よろしく」

やっぱり、道場選びを間違ったな。
月謝はまだテーブルの上にあった。今ならまだ封筒を引っつかんでダッシュで逃げられそうな気がする。
でも、彼女は足もかなり速かったはずだ。いつか、クラスマッチのソフトボールでボテボテのゴロをことごとく内野安打にして、対戦相手から「イチローかよッ！！」と野次られていたのを見たことがある。一〇〇メートル十六秒台のボクの鈍足では到底敵いっこない。追われるウサギが逃げるのに失敗すれば、それは死を意味する。
迷っている間に封筒は師範代の手の中に納まった。万事休す。
「三浦くん、こがんとこに通ったことあると？」
玲央の声にはどことなく意地悪な響きがあった。ボクはちょっとムッとしたけど、嘘をついても仕方がなかった。
「……ないけど」
「あっそ。んじゃ、特別にデモンストレーション見せてあげよっか」
彼女はそう言い残すと、スタスタと道場の隅のサンドバッグのほうに向かった。何をやるつもりなのか、ボクは彼女から目を離すことができなかった。
軽いステップを踏んでリズムをとった。ボクは格闘技は見る専門だけど、その分だけ知識や見る目には自信があった。彼女の身のこなしには――なんと言うか――実戦の匂いがした。流行りの言い方をするならオーラがあった。
ヒュッという短い息吹に続いて、見ているこっちの骨まで軋みそうなドスンッという重い音が響いた。右のミドルキックを放ったのだと分かったのは、彼女が脚を床に戻したあとだった。その後も立て続けに蹴りが入った。サンドバッグがまるでダウン寸前のファイターのようにゆらゆらと揺れる。とても中学生の女の子の蹴りの重さじゃなかった。
「――セイヤァ！！」
最後に一発、首を蹴り落とすようなハイキックがひときわ重い音をたてた。彼女は残心と共にフーッと長い息を吐くと、揺れるサン

ドバッグを手で押さえてボクにニッコリと笑いかけた。
おそらく親しげな笑みのつもりなんだろう。けれど、ボクには身動きのできない、あとは引き裂くだけの獲物を見つけたライオンの微笑にしか見えなかった。

2. 友だち

今日は見学だけということで、練習はしないで道場を後にした。本当は今日からでもやるつもりだったのだ。けれど、空手はおろか運動系の習い事などやったことがないボクには、いったい何を用意すればいいのか分からなかった。一応、事前に近所のスポーツショップを覗いてはみたけど、買ってから「ああ、これは違う」なんて言われたら目も当てられない。誰かに相談しようにも、家族以外には空手を始めること自体を内緒にしていたのでどうしようもなかった。

ボクがそう言うと、彼女は「一緒に着いてって、いろいろ教えてあげる」などと言い出した。贔屓にしている店が天神（てんじん）にあるらしい。そんな街中まで行かなくてもと思ったけれど、彼女はボクが言うことなんか聞いちゃいなかった。

そんなわけで、ボクらは西鉄バスで天神方面に向かっていた。話には聞いていたし、バスというのはどこも荒っぽい運転をするもんだけど、信号機が黄色になった瞬間にアクセルを踏んで交差点に突入するバスには福岡に来るまでお目にかかったことがない。

「――で、なんで空手はじめようって思ったと？」

屈託のない様子で彼女が言った。ボクは返事をせずに、ずっと車窓からの見える街並みを眺めていた。

バスは国道三号線沿いの筥崎（はこざき）宮の前に通り掛かっていた。放生会とかいう秋のお祭りの時期なんだそうで、とんでもなく大きな鳥居がある参道に出店がたくさん出ているのが見えた。どうでもいいけど、ボクはこのお祭りを「ほうしょうかい」と読んでかなり笑われた。悔しいので辞書で引いたら「ほうじょうえ」だったのでそう言い直すとさらに笑われる羽目になった。福岡では――というか、福

岡だけらしいけど――これで「ほうじょうや」と読むらしい。そんなこと、よそ者に分かるもんか。
たっぷり時間を置いてから、ボクは口を開いた。
「……別に。なんだっていいだろ？」
「まぁ、そうやけどさ。学年トップの秀才くんと空手が結びつかんかったとよねー。受験とか控えとうとにさ」
自分だってそうだろ、と思ったけど口にはしなかった。代わりに訊いた。
「栗原さん、ボクのこと知ってたの？」
「名前だけね。こん前のテストで高居（たかい）さん負かしたろ？」
「……ああ、それで」
高居さんというのは学年一の才女で通っている子だ。今どき珍しいお下げ髪と黒縁のセルフレームのメガネがトレードマークで、休み時間にはカフカやドエトエフスキーの文庫本を手放さないという話を聞いたことがある。一年生の最初のテストから三年生の一学期の期末テストまで、順位が出るあらゆるテストでトップを守り続けてきたらしい。それを夏休み明け早々のテストでボクが破ってしまったというわけだ。
入試ならともかく校内テストで順位を競っても仕方ないと思うんだけど、高居さんは首位陥落以降、廊下ですれ違うたびにボクを呪い殺すような視線を投げかけてくる。この頃、夜中に胸にキリキリした痛みを感じることがあるのは気のせいだろうか？
いや、それより彼女がそんなことを知っているほうが意外だった。
「栗原さん、他人の成績になんて興味あるんだ？」
「そうやなかけど、あの子とは同じクラスやけんね。それに一応、幼馴染ったいね。同じ官舎に住んどったこともあるし」
「官舎？」
「ウチの父さん、警察官。――あ、ごめん、お茶取って」
ボクはバスに乗る前に買ったお茶のペットボトルを手渡した。彼女はキャップを捻って口をつけた。白い喉が動くのを横で見ていて、

ボクはちょっとだけドキッとした。
天神のど真ん中、中央郵便局の前でバスを降りた。
意外と都会なんだな、というのが春先に初めて福岡に降り立ったときのボクの印象だった。東京のように気忙しい感じはしないけど人でごった返していて、人ごみ慣れしてないボクはその熱気に圧倒されそうになった。
天神というのはよそ者から見るとちょっと不思議な街だ。あまり高いビルはなくて――街のすぐ近くに空港があるからだそうだ――同じくらいの高さのビルが延々とメインストリートを挟んでいる様子は、文字通りにビルの谷間という言葉を連想させる。特に天神周辺はそれらのビルのほとんどが地下街と繋がっていて、まるで街全体が一つの建物のようにさえ思える。
「で、君の行きつけってどこにあるのさ？」
「新天町（しんてんちょう）――って言うて転校生に分かるかな？」
「アーケードの入口にからくり時計があるとこだろ。それくらい知ってるよ」
「へぇ。天神に遊びにくると？」
「たまにね」
遊びにというのは事実と異なる。母親と姉貴のお供で買い物に連れ回されるときしか来ないからだ。実はからくり時計もテレビで見て知ってるというだけだった。
ついでに白状してしまうと、こうやって女の子と二人で街を歩くのは初めてだった。それがあまり緊張しないで済んだのは、こう言っちゃ悪いけど、彼女がまるっきり女の子っぽくなかったからだ。
着ているのはタンクトップとTシャツの二枚重ねにリーヴァイスのジーンズ、FDHのロゴが入った野球帽。足元はアディダスのスニーカー。アクセサリの類はまったく身に着けていないし、バッグも持っていない。当然、プリクラを貼りまくった手帳もない。携帯電話のストラップも飾り気のない、文字通りのストラップ（紐）だ。リップクリームを丁寧に塗っていたのが、唯一の女の子っぽい仕草

だった。
　アーケードの入口にあるスポーツ用品店――という表現がピッタリの店だった――で道着やサポーター、帯、タオルやTシャツなどを買った。着心地は重要だと彼女が力説するので、ちょっと高かったけど柔らかい生地のものを選んだ。成人用では身丈はともかく横幅が大きすぎてジュニアサイズを選ばなければならなかったのが、ちょっとだけ気に入らなかった。帯は当然ながら白だ。
「栗原さんって黒帯なんだろ？」
　さっきの右のミドルからすると、そうであってもおかしくないような気がした。ところが、返ってきたのは意外な答えだった。
「白帯。道場じゃハッタリのために色帯締めとうけど、もともとウチって色帯制度なかとよね」
「そうなの！？」
「うん。まぁ、本当は昇段試験を受けとらんってだけやけど」
「どうして？」
「メンドくさいから。それに、黒帯とったら、ケンカんとき凶器扱いになるやん？」
「……そういう問題？」
　彼女は素知らぬ顔をしていた。
　買い物を終えて、同じアーケードの中にあるドトールに入った。何か甘いものでも頼むのかと思っていたら、彼女は一番大きなカップでホットコーヒーを注文した。砂糖もミルクも手にする様子はなかった。
　目の前で女の子がブラックを飲んでいるのに、自分が甘い飲み物にするのは子供に見られるような気がした。なので、ボクもブラックにした。くだらない見栄だということは分かっている。
　ボクはコーヒーを啜った。あまりの苦さに顔をしかめそうになるのを懸命に堪えた。彼女はボクと違って平然とコーヒーを飲んでいた。
「三浦くんて、イバラギから来たとやったっけ？」

「イバラギじゃなくて、イバラ”キ”だよ」
九州では、茨城はまず間違いなく彼女のように発音される。全国ニュースのアナウンサーでも間違える奴がいるくらいだから無理ないのかもしれないけど。
彼女はプゥっと頬を膨らませた。
「そがん嫌味ったらしく訂正せんでもいいやん。こっちの人間は知らんとやもん。三浦くん、向こうにおったとき、佐賀県の場所とか知っとった？」
痛いところを突かれた。
「ゴメン。福岡の隣は長崎だと思ってた」
「そうやろぉ？」
それからしばらく、彼女はボクがどんなところにいたのかを聞きたがった。生まれてこのかたずっと福岡で、親類縁者もだいたいそうなので、よその土地のことはあまり知らないらしかった。
ボクは自分が転々とした土地のことをとりとめもなく話した。福岡に来る前に住んでいたのは千葉県との県境で、利根川流域のその辺り一帯はチバラキと呼ばれて田舎扱いされているという話がなぜか異様にウケた。
「やったら三浦くん……」
「なに？」
「また転校するかもしれんと？」
彼女の声に残念そうな響きがあるのがちょっとだけ嬉しかった。
「かもっていうか、まず間違いなくね。もう慣れたもんだけど」
「そんなもん？　アタシやったら耐えられんかも」
「友だちと離れ離れになるから？」
「うーん、それより、知らんとこで新しか友だち作るとが大変そう。アタシ、ずーっと福岡に住んどうとに友だち少なかし」
「そう言えば、確かに君が誰かとつるんでるとこ、あんまり見ないような気がするね」
学校で特に浮いている感じではないし、彼女のことを悪く言う人

間もいないのに、彼女が誰かと仲良くしている場面を見た記憶はまるでなかった。どちらかというと彼女はいつも独りで、まるでその場にいないように振舞っているように思えた。
それだけじゃない。ボクのような拠所ない事情もないのに――ついでに言うなら、そんなにレベルの高い道場でもないのに――家から離れた香椎まで通っていることも、ボクが彼女に対してそういう印象を持つ理由だった。
「……やっぱ、そがんふうに見えようとかなぁ？」
彼女は頭の後ろで手を組んで、思いっきり背もたれに身体を預けた。小さく口を尖らせて視線だけを天井に向けた。
「苦手ったいねぇ、友だち付き合いとか。なんでみんな、あがんしょうもなかことで楽しそうにできるとかなぁ？」
「しらける、そういうの？」
「そうやないけど……」
彼女が同世代の女の子と感覚が合わないのは、ほんの数時間話しただけのボクにもなんとなく理解できた。ただ、彼女の何がそうさせているのかまでは分からなかった。
しばらくお互いに押し黙ったまま、コーヒーをすすった。
何と言えばいいのか、すぐには思いつかなかった。女の子と付き合ったことがないボクには、こういうときにどう対処すればいいかなんて経験の蓄積はない。
それでも凛々しい顔に寂しそうな翳を浮かべた彼女を見ていて、ボクは何かに突き動かされるように口を開いた。
「あのさ、もし……もしボクで良かったらだけど、友だちにならない？」
「へっ！？」
彼女は心底意外そうな顔でボクを見ていた。自分がどんな顔をしているのかは分からないけど、もしその場に第三者としていたのなら、おそらくボクも同じような顔をしているはずだった。
「……三浦くんとアタシが？」

「そう。ボクらは二人ともあんまり人付き合いが得意なほうじゃないし、周りの連中とじゃ上手く付き合えない。でも、友だちが要らないってわけじゃない。幸いにもボクらはお互いに、その面倒さをよく分かってる。だったら、相手の気持ちが分かる同士で友だちになれるんじゃないかな」

我ながら怪しい理屈だな。要するに同病相憐れむということじゃないか。

「……どうかな？」

「えっ？　うん、そうやねぇ――」

彼女は戸惑いを隠さなかった。しばらくボクをジッと見つめて口をちょっとだけ尖らせている。

自分でも何故、そんなことを言い出したのか、不思議でならなかった。せっかくちょっと打ち解けてきていたのにこれで台無しだ。いつものボクならここで「あ、いや、嫌なら別にいいんだけどさ」とか、適当にその場を取り繕おうとしただろう。

ところが、今のボクにはそんな考えはまるで浮かばなかった。何故だか分からないけれどここで引き下がってはいけないような気がした。

「――駄目かな？」

ボクは重ねて訊いた。玲央はフゥーっと長い息をついた。

「……よかよ。そこまで言うなら、そういうことにしよっか？」

「ホント？」

「うん。――でも、道場じゃアタシが姉弟子ってこと忘れんでよね」

「りょーかい」

ボクがそう言うと、玲央はようやく小さな微笑みを浮かべた。

3. 焦り

ボクが空手道場の練習生になってから一週間が過ぎた。
塾は週に三回だけど、道場にはどうしても外せない用事があった一日を除いて毎日、顔を出していた。ボクは一度始めたことはなかなか辞めないほうだけど、今回は続かないと思っていたらしく、家族はビックリしていた。
尤も、その間にやったことと言えば全身の関節が悲鳴をあげるようなハードな柔軟体操と、基本的な立ち方、足の運びの練習くらいだった。
格闘技には詳しいほう――ただし見る専門――なので、ズブの素人がいきなり実践的な練習をさせてもらえないことくらいは分かっていた。それに立ち技系格闘技の基本のすべてが土台になる立ち方にあることも分かっている。だから、それらの練習がつまらないとは思わない。
ただ、ボクにはあまり時間がないのも事実だった。
「ねぇ、ちょっといいかな？」
道場に人がいない日曜日の午後、ボクは玲央に声をかけた。さっきまで三戦立ち《さんちんだち》の練習をしていて、素人にはちょっと不自然な足の置き方をしていたせいで足首が痛い。鍛えていないとそうなるらしい。
玲央はキョトンとした顔をボクに向けた。
「なん？」
「いや、訊きたいことがあるんだけど……何やってんの？」
「柔軟」
いや、それは見れば分かる。ボクが言っているのは、それが空手道場でお目にかかる類の柔軟体操じゃなかったことだ。

前後に開いた両脚はペタンと床にくっついている。玲央はその体勢のまま、長い息を吐きながらゆっくりと上半身を前に倒していった。やがて頭から胸、腹のあたりまでが伸ばした脚の上にぴったりと折り畳まれていく。

その動作にはまったく無理をしているところがなかった。伏せた状態のままで両手を前に出してつま先を軽くつまむと、彼女はまるでなだらかな曲線を描く細長いオブジェのように見えた。

ボクはしばらく玲央の様子に見とれていた。玲央は時間をかけて身体を起こすと足の開きを一八〇度変えて、今度は反対の脚の上に同じように倒れ込んだ。

「身体、軟らかいんだなぁ」

玲央はさっきと同じようにゆっくりと身体を起こした。

「当然やん。っていうか、身体が硬い格闘家とかあり得んし」

「そうなんだ。いつもこんなに時間かけてやるの？」

「そう。怪我しとうないけんねぇ。――で、訊きたかことって何？」

ボクは口を開こうとして、思い直して首を横に振った。

「ううん、なんでもない」

玲央のような上級者が基礎を大切にしてるのに、素人のボクがそれをすっ飛ばすなんておこがましいにも程がある。彼女に背を向けて、教わったとおりに肩幅に開いた足をハの字に置くところから練習を再開した。

背後で彼女が立ち上がる気配がした。

「ねぇ、亮太。今日はこん後、何か予定あると？」

「いいや、何もないよ。今日は塾は休みだしね」

「じゃあ、一緒に帰らん？」

「一緒に？」

思わず声が裏返りそうになった。

狼狽するのにはそれなりに理由がある。香椎近辺ならともかく、電車の中では誰に一緒にいるところを見られるか分からないからだ。

男子と女子が一緒にいるとくだらない噂を流す奴はどこにでも必

ずいる。
朝、教室に入って黒板に相合い傘が落書きされていたりすると、どれだけヒマなんだと呆れてしまう。とは言え、自分が書かれる立場になれば笑ってもいられない。事実と違うからと否定すればするほど泥沼になるのが、この手の噂話の特徴だからだ。囃し立てる側からすれば事実がどうかなんてどうでもいいので、唯一の対処法は「相手にしないこと」という消極的なものにならざるを得ない。
「大丈夫かな？」
「アタシは見られたって構わんけどね。友だち同士で一緒に電車に乗るとって、別に悪かことやなかろ？」
「……まぁ、そうだけど」
玲央は「それがどうした？」と言わんばかりだった。確かに彼女を相手にそんな噂を流す命知らずがいるとは思えなかったし、流されたとしても彼女の場合、本当に「ふ～ん、そう？」の一言で流してしまいそうな雰囲気はある。
彼女がそうなのに、ボクが気にするのもおかしな話だった。もしスクープされたらそのときに考えるしかなさそうだ。

そんなわけで帰り道、ボクと玲央は二両編成の宮地嶽（みやじだけ）線の電車に揺られていた。
もともとそんなに乗客が多くない路線な上に通勤客がいないので、車内はひどくガランとしている。同じ学校の生徒らしき人影はない。
車両はおそろしくレトロで、窓は下半分だけがスライドするという田舎のバスでもなければ見ないような開き方をするし、天井には冷房の弱さを補うように扇風機が取り付けてある。詳しいことは知らないけど、利用客が少ない宮地岳線は同じ西鉄の別の路線の使い回しで、新しい車両は入ってこないらしい。
鉄道ファンだったらさぞ狂喜するところだろう。が、ボクはそっち方面にはあまり興味がない。

「――だけん、親指を中に握り込んだらダメって言いよるやん。殴った拍子に折れたらどうすると？」
玲央はボクの手を見て言った。知り合いの目がないというのもあってか、玲央の表情にも学校で見せるような素っ気なさはなかった。お互いにそんなに話し上手でもないのに、会話はやけにはずんでいる。
問題はその内容がまるっきり道場での会話の延長線上にあることだ。ボクがふざけ半分でやってみせた正拳突きの拳の握りがお気に召さなかったらしい。
「えーっと、こう？」
「うーん、さっきよりよかけど。指ばしっかり巻き込んで、親指と小指で締め上げるイメージで握るとよ。そうせんと拳が緩うなるし、拳頭が目標に当たらんけんね」
「拳頭？」
「拳を作ったときにできる指の付け根の骨の出っ張りのこと。空手の突きに限らんっちゃけど、パンチっていうとはここ――」
玲央はボクの手をとってその拳頭を押さえた。前触れもなく手に触れられてビックリしたのをボクはなんとか押し隠した。
「こん部分ば意識して殴るとよ。指の背の面全体ば当てるっちゃなくて」
玲央はボクの顔の前で自分の拳を握ってみせてくれた。
女の子の手が見るからに硬そうな武器に早変わりするのを、ボクは感嘆混じりに見ていた。手のひらを合わせれば多分ボクの手のほうが大きいはずだけれど、彼女に比べたらボクの拳は出来損ないのいびつなゴムボールだ。
玲央の「正しい拳の握りかた」講座は、列車が三苫（みとま）駅に着くまで延々と続いた。
分かりやすいように丁寧に教えてくれるのは、彼女が他人に教え慣れているというのとは別に、彼女の世話好きな一面を表しているような気がした。それは確かにありがたい話だと思う。

でも、せっかくだから空手以外の話――例えば趣味の話とか――をしようと思っていたのだ。デートなんてつもりはなかったけど、二人でゆっくり話ができる機会なんて他に見当たらない。
ボクは心の中で魂を吐き出すような深い溜め息をついた。

三苫駅を出ると、玲央は買い物をして帰ると言った。
「亮太はどうすると？　まっすぐ帰ると？」
「別にそんなに急ぐこともないけど。どうして？」
「やったら、買い物付き合うてよ。一人でテクテク歩くと好かんし」
特に断る理由もないので、駅から少し歩いて大通りにあるサンリブに入った。福岡では割とあちこちにある地元のスーパーで、デイト・オブ・バースの曲をＢＧＭにしたイメージＣＭをテレビでしょっちゅう見かける。
お菓子とかジュースでも買うのかと思っていたら、玲央は手押しのワゴンにカゴを載せて、迷うことなく食料品売り場に向かった。
「おつかい？」
「ん……。まぁ、そんな感じ」
彼女はメモを見るわけでもなく、目にとまった商品を次々にカゴに放り込んでいった。パンや乾物、調味料、肉、野菜、豆腐やこんにゃく、そのほか、いろんなものをまんべんなく入れるとカゴはすぐに満杯になった。
驚いたのは「何をどれだけ買うか」を玲央が自分で決めていることだった。お使いと言うよりまるで主婦の買い物のようだ。
いや、我が家の女性陣よりよほどマシかもしれない。ウチの母親なんか、いつも両手に持ちきれないほど買った挙句、冷蔵庫にどうやって入れるか悩んでばかりいる。その娘である姉貴も似たようなもんだ。どうして、母娘でこんなつまんないところが似なきゃなんないんだろ。
ボクがそういったことを話すと、玲央は事も無さげに「ウチ、母

親おらんけんね」と答えた。
「そうなんだ？」
「小学校の六年んときにね。ずうっと病気やったっちゃけど、年末に一時帰宅で帰ってきたときに容態が悪うなって、そのまんま」
「……悪いこと訊いちゃったかな？」
「そがんことなかよ。もう三年以上も前の話やし」
「じゃあ、それからはお父さんと二人で？」
彼女に兄弟姉妹がいないことは前に聞いていた。
「ずっと二人暮らし。アタシ、この歳ですでに主婦とよ。意外やろ？」
玲央はそう言って笑った。テキパキとした買い物の様子を見ていなかったら、彼女が家事をこなしているところなんて想像もできなかっただろう。
「……ところでさ」
鮮魚売り場でサバを三枚おろしにしてもらっていると、唐突に玲央が言った。
「なに？」
「やっぱり、基礎ばっかりやらされるとは面白うない？」
一瞬、質問の意味が分からなかった。それが道場でのボクの質問と繋がっていることに気づいて、ボクはひどく気まずい――と言うか、申し訳ない気持ちになった。
「……そんなことないよ。それに三戦の構えができたら、次はいよいよ突きの練習だって師範代も言ってたしさ」
「嘘つかんでもよかよ」
彼女の声に咎めるようなニュアンスはなかった。
一瞬、嘘をつき続けようかと思った。けれど、それはできなかった。ボクは彼女から目を背けたままで大きな溜め息を洩らした。
「――つまんなくはない。でも、もどかしい」
「やっぱりね。そがんやなかかな、とは思っとったっちゃけど」
「君、テレパシーでも使えんの？」

「そがん怪しか能力もっとらんけど。だいたい入門してきて一、二週間すると、みんな似たようなこと言い出すもんったいねぇ。やれ、技の練習させろとか、組手やらせろとか。理由はいろいろやけど。最初から空手舐めとう奴もいるし、ただ単に堪え性がなか奴もいるし――」

「耳が痛いね」

ボクは玲央を遮った。これ以上話せば、空手を始めようと――いや、強くなろうと決心した理由を言わなきゃならなくなる。

ところが、彼女はめげずに言葉を続けた。

「――あと、そこまで悠長なこと言うとられん、とかね。一刻も早く強うならないけん理由があったりして」

「えっ！？」

「図星やろ？」

否定の言葉を探したけど見つからなかった。彼女が言うとおりだったからだ。

玲央は少しだけ得意そうな笑みを浮かべていた。理由を根掘り葉掘り訊かれるのかと思うと、内心ウンザリした。

けれど、彼女は静かな声で「――よかよ、アタシが教えてやろっか？」と言っただけだった。長く鍛錬を続けている彼女からすれば、ボクのように「手っ取り早く強くなりたい」なんて人間は軽蔑されてもおかしくなかった。

そんなボクの焦りを気遣ってくれる彼女の優しさが嬉しかった。だけど、そこまで厚かましいことを言うつもりはなかった。

「うーん、もうちょっと形になるまでは遠慮するよ」

「どうして？」

「まだ命が惜しいから。玲央と組手なんかやったら、生きて道場を出られる保証はないもんね」

「うっわ、亮太ってアタシのこと、何と思っとうと！？」

「友だちだよ。君がそう言ったろ？」

「……何、それ」

玲央はプウッと頬を膨らませた。
その表情はそれまで見た中で一番かわいかった。笑顔がかわいい子はいくらでもいるけど、怒った顔が魅力的な子にはそれまで会ったことがなかった。
ボクは買い物の間中、チラチラと玲央の横顔を窺っていた。シチュエーションはちょっと戴けなかったけど、初めての経験にボクはドキドキしていた。
誰だよ、彼女を〈ザ・ビースト〉なんて呼んだのは。

4．　手料理

スーパーからの帰り道、ようやく話題は格闘技のことを離れて、学校での出来事やボクが知らない先生たちの逸話に及んでいた。
「――でね、あいつ、シュートのフォームがどうとか言うて、女子の身体に触ろうてするっちゃけん。もう、ホント腹立つ！」
玲央が言うあいつとは去年赴任してきた体育教師のことだった。彼女がたまに助っ人に駆り出されるバスケットボール部の顧問なんだけど、指導にかなり問題があるらしい。
「それってセクハラじゃないの？」
「じゃないの、やなくて正真正銘のセクハラって。ホント、いつかローリング・ソバットで蹴っ飛ばしちゃろうて思っとうとよ」
「そのときは呼んでほしいな。ちゃんとリングサイドＳ席の料金払うから」
「場外乱闘に巻き込まれても知らんよ？」
二人で爆笑していると、玲央の携帯電話が鳴った。彼女はディスプレイを見て少し迷ったけど、手ぶりで断りを入れて電話に出た。ボクは礼儀正しく彼女のそばを離れた。
「……もしもし、どうしたと？」
ちょっとぶっきらぼうな声。それが急に怒鳴り声と言っていい大きな声に変わった。
「ちょっと待ってって、来られんってどがんことッ！？」
しばらく無言。眉根を寄せたキツイ眼差しは今にも誰かに殴りかかりそうな凶悪さだった。
「ねぇ、あんた何考えとうとって。あんたが食べたかって言うたけん、準備しとうとよ！？」
再び無言。たぶん、相手が言い訳をしているのだろう。憤怒の表

情は徐々に和らいできているけど、それでも怒りと失望のオーラが彼女のまわりに漂っていた。
「……分かった。うん、じゃあね」
ディスプレイを一睨みして、彼女は電話を切った。
「どうしたの？」
訊かないほうがいいような気がしたけど、何事もなかったように話せる雰囲気じゃなかった。しばらく憮然とした顔だった玲央は、やがて照れたように苦笑いした。
「父さんの同僚で、ウチにご飯たかりに来る半居候がおるっちゃけどねぇ。そいつが仕事で急に来られんごとなったって」
「その人の分のご飯も準備してたの？」
「そうよぉ。まったく、イワシの生姜煮が食べたかとか言うけん、ちゃんと霜降りまで済ませてあったとに」
「霜降り？」
それって肉の用語じゃないのかというボクの質問に、玲央はちょっと得意げな表情を浮かべた。それは魚介類の下ごしらえを指す用語でもあって、熱湯をサッと通した後に冷水で洗うことで臭みやぬめりをとることを言うのだそうだ。
「君、料理、得意なの？」
「あーっ、亮太、アタシのことバカにしとうやろ？　これでも家庭科と体育だけはずーっと五なんやけんね」
体育は納得だけど家庭科の五はちょっと意外だった。でも、彼女が言うように「この歳ですでに主婦」なら、中学校の家庭科の課題くらいは朝飯前なのかもしれない。
「自分は食べるだけやけんて勝手なもんよねぇ。フン、奥さんにご飯も作ってもらえんダメ亭主のくせにさ」
玲央はまだ憤懣やるかたないといった感じだった。それにしてもえらい言われようだな。
「イワシの生姜煮かぁ。美味しそうだね」
とりなすつもりで言っただけのつもりだった。ところが玲央の顔

がパッと明るくなった。
「亮太って魚、好きと？」
「そうだね、どっちかって言うと肉より魚派。脂っぽいのが苦手でさ。だから痩せっぽちなんだって言われるけど」
「へぇ、やったら、家でも魚がメイン？」
「ところがそうでもないんだな、これが。父さんが大の魚嫌いでね。我が家では煮魚は滅多に食卓に上らないんだ」
「ふうん……。ねぇ、代わりに食べてく？」
そう言って、玲央はすぐに「……あ、もう家で用意しとう時間やね」と付け足した。みっちり練習したせいで時計はすでに六時を過ぎていた。
どうしようかなと少しだけ迷って、ボクは口を開いた。
「……んー、まぁ、家に帰っても、何にも用意されてないんだけどねー」
「なんで？　どっかに食べに行くと？」
「そうじゃないよ。茨城の爺ちゃんが畑でぶっ倒れて入院したんで、母さんが実家に帰っちゃってるんだ。なのに、父さんは接待ゴルフでいないし」
「お姉ちゃんは？　おるて言いよったよね？」
「残念。ウチの姉貴は料理はまったくダメなんだ。たぶん、ボクのほうが上手い」
「やったら、食べに来たらいいやん。ウチも父さん遅いし、アタシも一人で食べるのつまらんしさ」
「いいの？」
「もちろん。よし、決まりっ！！」
ひょんなことから女の子の家に行くことになり、しかも手料理をご馳走になるという僥倖に、ボクの頬は自分で分かるほどゆるんでいた。
しかし、ふと、半年ほど前に我が家で起きた悲劇が脳裏をよぎった。姉貴が同級生のボーイフレンドを家に呼んで手料理を振る舞っ

たときのことだ。
料理の見た目はそれほど悪くはなかった。ただ、最初の一口を食べたボーイフレンドの眉間に刻まれた皺が味の酷さを物語っていた。
それでも彼には「こんなの食えるかッ！！」と怒鳴って卓袱台をひっくり返す、という選択肢は用意されていなかった。彼は悲痛な笑顔を浮かべながら黙々とテーブルの上の料理を口に運んだ。
最初のうちは彼も善戦した。姉貴の目を盗んで水で流し込む――ああ、なんて美味しそうに飲んでいたことか！！――という高等テクニックも見せてくれた。
しかし、ごまかしは所詮、ごまかしでしかなかった。徐々に食べるペースは遅くなっていき、最後にはまったく箸が進まなくなっていった。ダイニングをチラチラと覗いていたボクには、そのボーイフレンドが何発もボディブローを喰らって、残酷なほど確実に力を奪われていくボクサーにしか見えなかった。ボクは生まれて初めて、男に生まれることの辛さを目の当たりにすることになった。
料理が好きなことと料理が上手なことの間には残念ながら天と地ほどの隔たりがある。主婦の誰もが料理が上手だというわけでもない。
安易に喜んでいるけど、玲央は大丈夫なんだろうか？

「――うっわ、やっぱいよ、コレ！」
頭が悪そうなので普段は使わないようにしている感嘆詞が、思わず口を衝いて出た。
心配はまったくの杞憂だった。それどころか、ボクは男に生まれることの喜びを感じていた。気になり始めてる女の子の手料理が美味しいこと以上の幸せがこの世にあるだろうか。
料亭や割烹で出てきそうな茶色の器に盛られたイワシは美味しそうな煮汁の色に染まっている。上には針生姜が天盛りにしてある。市販のものじゃなくて、玲央が小さな包丁で刻んでいたものだ。一

緒に煮たダイコンにもしっかり味がついている。ちゃんと下ごしらえがしてあるからか、臭みはまったく感じられない。
付け合せはだし巻玉子と冷奴、ナスと油揚げの味噌汁。ご飯はしっかりコメが立っていてツヤツヤだった。他にも遠縁の親戚から送ってきた高菜漬のバター醤油炒めと、これも彼女のお手製だという筑前煮を温めて出してくれた。最後の一つは「昨日の残りなんだけど……」と申し訳なさそうだったけど、実はそれが一番美味しかった。
「ご飯、お替りなしじゃ足りんくなかった？」
「そんなことないけど。どうして？」
「男の子やけん食べるかなーって。父さんもあいつも米粒あんまり食べんし、それで普段からそんなに炊かんとよね。炊いて冷凍した奴でよかならあるけど？」
「大丈夫だよ、おかずでお腹いっぱいになりそうだから」
あいつというのはこんなに美味しい生姜煮を食べ損ねた半居候のことだろう。彼女が台所で料理をしている間、待たされていた居間の写真でその人の顔は見ていた。
バックはどこかの遊園地の入場口だった。今よりもちょっとだけぽっちゃりした玲央の隣に、彼女が普通の背丈に見えるほど背が高いハンサムな男が写っていた。茶色がかった長髪とメタルフレームのメガネのせいであまり警察官っぽくはない。どっちかと言えば、白衣を着て研究室にいるほうが似合っている感じだ。玲央を挟んだ反対側には東南アジアっぽい濃い顔立ちの女の人が写っていた。たぶん、そっちがご飯を作ってくれない奥さんなんだろう。
特別に意識する対象じゃないし、したってしょうがないことも分かっている。けれど、玲央が口にする〈あいつ〉という言葉に見え隠れする親しげな響きはボクの胸を重くした。
二人できれいに食べ物を平らげて、彼女の部屋に移動した。彼女は自分の机の椅子に、ボクは他に椅子がないのでベッドの縁に腰を下ろした。

「あー、美味しかった」
「ありがと。そがん言うてもらえるとが一番よねぇ」
玲央は二人分のお茶を運んできてくれていた。彼女は大のコーヒー党だけど、さすがに和食の後で飲む気はしないようだ。
アパートの七階の部屋は窓を開けておくと、いい感じに風が抜けて涼しかった。外のいろんな音が流れ込んできていて、二人で押し黙っていても静かというわけじゃない。もともとお互いにおしゃべりというわけでもないので、そうしていてもあまり気詰まりな感じはしない。
しかし、ずっとそのままというわけにもいかない。
生まれて始めて一人で女の子の家に遊びに来たという事実に、ボクは今さらながらドギマギしていた。しかも家族は誰もいない――文字通りの二人っきりだ。何か話さなきゃと思えば思うほど、何を話題にすればいいのか分からなくなる。
宮地岳線に乗り込む前にあれほどやったシミュレーションは、まったく役に立たなかった。
「ねぇ、亮太」
不意に玲央が口を開いた。ボクは声が裏返りそうになるのを懸命にこらえた。
「な、なに？」
「アタシとおったらつまらん？」
「……どうして？」
「さっきからずうっと黙っとうけん。――ま、しょうがなかよね。共通の話題って言うても空手しかなかし」
「……いや、そんなことないけど」
けど、なんだ。
自分で自分に思いっきりツッコミを入れてみる。ボクは助けを求めるように部屋を見回した。何もなければこの際、さっきの写真の夫婦でもいいからネタにするつもりだった。
ふと、机の上のフォトスタンドに目が止まった。写っているのは

面長のきれいな女の人だった。
「あれ、君のお母さん？」
「ん？　――うん、そう。なかなか美人やろ？」
目許は玲央より柔らかくて、くっきりした切れ長の二重瞼が印象的だ。緩やかなウェーブがかかったセミロングの髪がとても似合っている。自分の母親と比較してしまうせいか、同級生の母親は実際以上に綺麗に見えることが多いけど、その分のバイアスを差し引いても写真の女性は別格の美人だった。
玲央ももう少し大人になって髪を伸ばしたら、こんな感じになるんだろうか。
「誰かに似てるね」
「誰？」
「小野リサって知ってる？　ボサ・ノヴァ歌手の人だけど」
「ああ、誰かに言われたことある」
玲央はうっすらと儚げな笑みを浮かべた。得意げな響きと寂しさが入り混じったような不思議な声音。しかし、それは急にからかうような勝気な笑みに取って代わられた。
「あのさぁ、言うたら悪かけど、小野リサの顔とかファンでもなかなか知らんよ？　まさか、そん歳でボサ・ノヴァとか聴くと？」
「……悪いかよ」
ボクは流行りのＪ－ＰＯＰやラップ、ヒップホップにはまるで興味がない。アイドルなんて論外だ。姉貴のせいでヒット曲くらいは耳に入ってくるけど、そうでなければまず聴こうとも思わない。さすがにまだジャズにどっぷりはまる気はしないけれど、そうは言いつつこの前、天神のタワーレコードでジョシュア・レッドマンのアルバムを買ってしまった。
「ジジくさぁ……」
玲央は呆れたように言い放った。言い返そうにも自覚があるので言葉が出てこない。
「悪かったね。そういう玲央はどんな曲を聴くのさ？」

「アタシ？　アタシはねぇ……デレク・アンド・ザ・ドミノスとか、ダリル・ホール・アンド・ジョン・オーツとか。あと、ジプシー・キングス」
「誰だよ、それ？」
いや、ボクだってホール・アンド・オーツくらい知ってる。デレク・アンド・ザ・ドミノスもエリック・クラプトンが在籍したバンドだということは知ってるし、曲も三菱のクルマのＣＭで使われてるからそれだけは知ってる。ただ、どっちもボクらの世代が聴いてるバンドじゃない。第一、デレク・アンド・ザ・ドミノスはもう存在しない。ジプシー・キングスは本当に知らない。
「なんだよ、自分だってババくさいじゃん。普通、女の子っていえばＢ’ｚとかケミストリーとか、そうじゃなきゃ、ジャニーズ系にキャーキャー言ってるもんじゃないの？」
「冗談言わんでよ。アタシにそがんと似合うと思う？」
玲央は顔をしかめて大袈裟な溜め息を洩らした。ボクも思わず苦笑いしてしまった。アイドルの顔が印刷された団扇をもって飛び跳ねる玲央なんて、確かに想像もつかない。
ボクはテレビの横にあるコンポのラックを見た。そこに並べてあるＣＤはほとんどが洋楽のものだ。中には知ってるバンドのものもあるけど、大半はそうじゃないものだった。
「洋楽、好きなんだね」
「父さんがそがんとばっかり聴くし、それで育ったけんね。でも、最近の曲も聴くとよ」
何か聴いてみたいと言うと、玲央は少し考えてシェリル・クロウの〈Ｉｆ　Ｍａｋｅｓ　Ｙｏｕ　Ｈａｐｐｙ〉という曲を選んだ。そんなに最近の曲でもないような気がするけど〈愛しのレイラ〉よりは確かに新しい。
玲央はメロディに合わせて小声で歌を口ずさんでいた。
意味を理解してるのかどうかは分からないけど、適当な怪しい英語じゃなくて、ちゃんと歌詞を覚えているようだった。ハード・ロ

ックっぽい歪んだギターが奏でるゆったりしたメロディと、玲央の低くてちょっとハスキーな声は意外に合っていた。
「へぇ。歌、上手いんだね」
「そう？」
曲が終わってボクがそう言うと、玲央は照れ臭そうにはにかんだ。

5. 縦蹴り

取り留めのない話をしているうちに外はすっかり暗くなっていた。留守番電話に遅くなると吹き込んではおいたからボクのほうはいいんだけど、女の子の家にあんまり居座るわけにもいかない。ボクはベッドから腰を上げた。

「えっ。もう帰ると？」

「ずいぶん遅くなっちゃったから」

「そのセリフ、普通は逆よね」

可笑しそうに言って玲央も椅子から立ち上がった。灯りを消そうとして、彼女は急に悪戯っぽい笑った。

「そうそう。最近、こんな練習しようとよ。ちょっと行儀悪いっちゃけど」

「えっ？」

ボクの返事を待たずに彼女は右構えの形をとると、そのまま一歩踏み出しながら身体を半回転させて、スゥッと右脚を持ち上げた。まるで爪先に糸がついていて、それを巻き上げているようなスムーズさだった。上半身を傾けてバランスを取っているので、勢いをつけずにやっているにも関わらず、身体はまったく揺れていない。

何をする気だろうと注視してると、玲央は上げた足の指で蛍光灯の紐をつまんで器用に灯りを消した。ちゃんと三回引っ張って。

「すごかろ？」

「……あ、ああ、すごいね」

言いながら、ボクの心はその場にはなかった。いくら膝丈のハーフパンツと言っても、これだけ高く脚を上げれば裾がずり上がって真っ白な太腿が剥き出しになる。それもボクの目と鼻の先で。

「な、なんで、そんなことしようと思ったんだよ？」

「うーん、今、ちょっと上段回し蹴りの練習しよるっちゃけど、その最中に何となくできそうやったけん」
「へぇ……って、君、この前、ボクの目の前でハイキック蹴ってなかった？」
　最初に道場で会った日、彼女はデモンストレーションと称してサンドバッグに見事な上段回し蹴りを叩き込んでいた。
「あれとは違う奴ばねぇ。縦蹴りって言うて分かる？」
「分かるけど……。あ、ひょっとして、玲央がやろうとしてるのってブラジリアン・キック？」
　玲央はコクリとうなづいた。
　ブラジリアン・キック――ブラジリアン・ハイキックと呼ぶ人もいる――は極真空手出身のＫ－１ファイター、グラウベ・フェイトーザの代名詞と言ってもいい技だ。この技の本場ブラジルではクビゲリとも呼ばれていて、その名の通り、横回転のハイキックを腰を返すことで縦方向の蹴り下ろしに変化させて、相手の首筋や肩口、鎖骨なんかを狙う変則的な上段縦蹴りのことだ。単純に蹴り込む回し蹴りに比べると威力は落ちるけど、予想外の方向から襲ってくるのでノーガードの状態で喰らうことになる。決まれば一撃必殺の技だ。
「すごいね。できそうなの？」
「脚を上げるとこまではなんとかね。でも、その先の腰の返し方のコツがイマイチ掴めんとよねぇ」
　もう一度、玲央は脚を上げた。さっきよりも身体を開いて、テレビで見るフェイトーザと同じような構えになっている。脚が最大到達点にきたところで彼女は腰を返そうとした。
　その途端にへっぴり腰のような感じでバランスが崩れた。
「危ないッ！！」
　ボクは慌てて手を伸ばした。とっさにボクの手と肩を掴んだ玲央に引き倒されないように必死に踏ん張った。
「ふー、ビックリしたぁ」

何とかでその場で持ち応えた玲央は、少しおどけて額を拭う仕草をしてみせた。いや、そんな呑気な話じゃないから。
「しっかりしてくれよ。倒れて腰でも打ったらどうするのさ」
「心配してくれようと？」
「なに、バカなこと言ってんだよ」
からかうような口調に反応してぶっきらぼうな言い方になる。まだ手を握ったままなことに気づいて、自分の身体が熱くなるのを感じた。
「亮太ってば、怒っとうと？」
「怒ってねーよ」
クスクスと笑う玲央をジロリと睨みながら、乱暴な手つきにならないようにそっと身体を離した。転倒しそうになった彼女より、ボクの心拍数のほうがはるかに跳ね上がっているに違いなかった。

一〇月が目の前とは思えないほど厳しい残暑が続いていても、日が沈めばそれなりに涼しくなってくる。昼間仕様の半袖のポロシャツだと肌寒いくらいだ。
隣を玲央が歩いている。近くのコンビニに行くというのでそこまで一緒に行くことになったのだ。と言うか、半ば強制的にそういうことになっていた。
「ボクんち、方向違うんだけど？」
「女の子一人で夜道歩かせるつもり？」
……都合が良いときだけオンナノコかよ。
「どう考えても、玲央のほうが強いじゃないか」
「なんか言うた？」
「いいえ、何も。行くんならさっさと行こう」
「ちょっとぉ、なんでそがんせかせか歩くと！？」
それはこの辺りはもう校区内で、ざっと思い浮かべただけでも一〇数人のクラスメイトの家が近くにあるからだ。晩ご飯までご馳走

になっておいて今さらオタオタしたって始まらないと覚悟していても、誰かに見られることへの不安は拭えない。夜も遅くなって一緒にいれば何を言われるか、分かったもんじゃない。

恥ずかしいとかバツが悪いとかいうことじゃなかった。悪いことをしてるわけじゃないんだから、周囲に囃し立てられたって堂々としていればいいことも分かってる。まったくその気がない子となら面倒なだけだろうけれど、相手が玲央ならボクは心の中でガッツポーズをするかもしれない。

恐れているのは玲央のほうから距離を置かれることだった。何だかんだ言っても女の子だ。その気がないのに――まぁ、それはそれでへこむけど――騒がれるのは鬱陶しいだろう。そうでなくても彼女のことだからボクに妙な気を使ってくれかねない。

コンビニでの買い物――格闘技系の雑誌と日用品をいくつか――を終えると、玲央は「じゃ、また明日ね」と言い残して自分の家のほうに歩き始めた。途中、一度だけ半身で振り返ると屈託のない笑みで小さくバイバイをする。

ボクは小さく溜め息をついて、小走りで彼女の隣に並んだ。玲央は驚いたように目を瞬かせた。

「どうしたと？」

「女の子一人、夜道を歩かせちゃいけないんだろ？」

玲央はニンマリと意地悪そうに笑った。

「……ふぅん、意外と男の子やねぇ」

「意外は余計だよ」

道すがら、玲央は今夜のＫ－１ジャパンＧＰの話をしていた。内容を要約すると「武蔵は勝ったとしても判定でギリギリ」というものだけれど、それは日本中の総意に違いなかった。

「なんで相手の出方ばっかり窺うとるとかな。あれじゃ相手にペース握られると当たり前って。やられとうないとは分かるけど、自分から仕掛けてこん相手は怖くなかとよね」

「そんなに言うなら、玲央が出て行けばいいのに」

ボクは混ぜっ返す。
「ホント、男やったらK－1ファイターになりたかったな」
玲央は軽くロー・キックを放つ真似をした。他の女の子がやれば思わず引いてしまいそうな光景だけど、彼女がやると不思議と違和感はなかった。
「あーあ、何で上手くいかんとかなぁ？」
「……？」
さっきの転倒未遂のことだと気づくのに少し時間がかかった。
「たぶん、軸足が充分に返せてないからだと思うよ」
「軸足？」
正面から入って回し蹴りを放つ場合、軸足はおよそ九〇度回転する。格闘技の蹴りというのは脚を振るのではなく体軸の回転を脚に伝えるものだからだ。同じキックでも軸足をしっかり置いて足を振るサッカーとはここが決定的に異なる。
ボクもそんなに注意して見ているわけじゃないけど、覚えている限りではフェイトーザは上半身を倒しながら身体を開いて脚を振り上げている。そこまでは普通の上段回し蹴りだ。しかし、そこからさらに腰を返す、つまり体軸を回すにはさらに軸足が回らなくちゃならないはずだ。股関節の柔らかさも加味されてはいるだろうけど、人体の構造上、曲がらない方向へはどうしようもない。
「亮太って理論だけは黒帯よねぇ？」
「どうせ格闘技オタクだよ。いいからやってみなよ」
「こう？」
玲央はさっそくその場で軸足をすらしてみた。相手のほうを向くほど踵を返すと、イメージとしては高く上げた脚で何かを跨ぎ越すような格好になる。さっきのへっぴり腰が嘘のように玲央の脚が空中できれいな弧を描いた。
「うまく蹴れるみたいだね」
平然を装いつつも、ボクは内心、とても誇らしい気持ちだった。ところが玲央は納得していないようだった。

「グラウベって蹴った後、こがん後ろ向きになっとったっけ？」
「実際には相手に当たるから、そんなふうに振りぬくことってないような気がするけど。なんならビデオで確認してみたら？」
「それがさー」
　玲央は腹立たしそうに頬を膨らませた。
「どうしたの？」
「まとめとったビデオにバカ親父が上から違うの録画してさ。アタシ、手元にグラウベの映像持っとらんとよねぇ」
「ボク、持ってるよ」
「えっ？」
「いろいろ録り溜めした奴があるんだ。試合もだけど、ニュースの映像なんかもね。道場でサンドバッグ蹴ってる奴とか。全部ＰＣのハードディスクに放り込んであるからＤＶＤに焼いてあげるよ」
「ホント！？」
　玲央はこれまでで一番表情を輝かせた。
「いつ？」
「帰ってさっそく焼いとくよ。明日、学校で渡そうか。それとも道場でがいいかな」
「それ、時間かかると？」
「焼くの自体は……そうだな、一時間もかかんないけど。板はあるし」
「今から貰いにいったらダメ？」
　意外と気が短い――というか、堪え性がないんだな。
　この時間でも家に誰もいないことには確信があった。たぶん、父親はゴルフのあとはそのまま中洲だし、姉貴はバイトのはずだ。ボクはオーケーと答えた。
「でもさ、どうしてブラジリアン・キックなんだい？」
　長身で手足が長い玲央がやれば見栄えがする技なのは間違いない。ただ、わざわざそんな難しい技を覚えなくても彼女には左右どちらでも蹴れる強烈なミドルキックがあったし、派手な技ならサンドバ

ッグ相手に胴回し回転蹴りだってやってのけていた。
　玲央の返事は「だって、カッコいいやん？」だった。まぁ、確かにそうだけど。
「それにさぁ、アタシ、グラウベ好きとよねぇ」
「空手だから？」
「そう。ホーストとかも好いうとうけど、やっぱりね」
「だったら、フィリョだっていいんじゃ？」
「うーん、フィリョも嫌いやなかけどね。極真の世界大会のときも応援しとったし。でもアタシ、脚光浴びるスターより、なかなか勝てない二番手ば応援しとうなるタイプなんよね。自分がそうやけんかもしれんけどさ」
　この一週間、道場で玲央を見ていて、少なくとも同世代には彼女を負かせる相手などいないように思えた。スタミナさえもてば男子とだって渡り合えるだろう。
「誰か、勝てない相手でもいるの？」
「おるよ、もちろん」
「そんなに強いの、そいつ？」
「へっ？」
　唖然とした表情で振り返った玲央は、少し時間を置いてから思いっきり吹き出した。ボクは恥ずかしさと気まずさに思わず口を尖らせた。
「……なんだよ、空手のライバルの話じゃないの？」
「あったりまえやん。アタシだって格闘技ばっかりしよるわけやなかとよ？」
「だったら、誰に勝てないのさ？」
「それはナイショ」
　玲央はボクの目を覗き込むように見ると、意味ありげな微笑を浮かべた。

6. 決意

ハードディスクの中から動画ファイルを選んで、ＤＶＤライターを起動した。

本当はグラウベが映ってるところ、中でもブラジリアン・キックのシーンだけを抜き出したほうが短くまとまるし、そうするつもりだったんだけど、玲央が待っているのでまとめて全部放り込むことになった。ファンの彼女にしてみれば他のシーンだって見たいだろうし。

外付けの高速ドライブにまっさらのディスクを挿し込んで、画面の〈開始〉をクリックした。

「よし、あとは焼き終わるのを待つだけ、と。――どうしたの？」

玲央はボクのベッドにちょこんと腰掛けて部屋の中を見回していた。何故か、眉間にすごく深いシワが寄っている。

「きったなぁ……」

ボソリとした呟き。玲央はベッド脇のテーブルに載せてあるプレイステーション２のカバーを指で撫でた。白い綿のようなホコリが指先に纏わりついている。

「なんコレ、ホコリだらけやん。あーあ、もう幻滅。亮太ってもうちょっときれい好きって思っとったとに」

「あ、いや、その……」

ボクは彼女の部屋――というか、彼女の家の中を思い出した。仕事が忙しくて家のことをできないお父さんと二人暮らしならば、家事はぜんぶ彼女がやっているということになる。なのに、散らかったり汚れたりしている様子はまったくなかった。

指先をティッシュで拭うと、玲央はそれでプレステの本体の汚れも拭き取った。意識してやってるというより、そうするのが当然の

ような手つきだった。
「そんなにひどい？」
「時間があったら掃除したいくらい」
「オトコの部屋なんて、誰だってこんなもんだと思うけど？」
「知らんって。男の子の部屋とか入ったことなかし」
玲央の目には呆れの色が浮かんでいた。自分の部屋がどうだろうと他人にとやかく言われる筋合いなんてないのに、ボクは首をすくめて恐縮するしかなかった。
「そんなに掃除が好きだったら、バイト代払うから片付けてよ」
「してあげてもよかけど、ベッドの下のエッチな本とか見つかっても知らんよ？」
「ないよ、そんな物」
少なくともベッドの下には。
これ以上、玲央を不機嫌にするわけにはいかないので、ボクは彼女をリビングに連れて行った。そこだって玲央の家に比べればかなり雑然としているけどボクの部屋よりはマシだ。Ｋ－１の放送を見るかと訊いたら「録画予約してるから見ない」という返事が返ってきた。
「もうちょっと時間かかるから、それまでゲームでもやんない？」
「えー、アタシ、ゲームせんけんよう分からんよ。プレ２とか持っとらんし」
「大丈夫、教えてあげるから。何やろうか？」
玲央はボクが置いたゲームディスクのケースを覗き込んだ。そのうちの一枚に彼女の目は釘付けになった。
「ねぇ、これやろっ！」
彼女が取り出したのはＫ－１のゲームだった。ホント、好きなんだな。
「それ、操作がややこしいよ？」
「教えてくれるっちゃろ？」
「そうだけど……」

基本的な操作のレクチャーと、彼女のコントローラーだけ一発で大技を出せるように設定してから試合は始まった。
ハンデということでボクは日本人ファイターしか使わなかったけど、初心者の彼女がまともな操作なんかできるわけがない。ジェロム・レ・バンナｖｓ．武蔵という苦戦必至の組み合わせでもハイパー・バトル・サイボーグはあえなく撃沈した。
「あぁん、ちょっと待ってってッ！　なんで武蔵がそんな前に出てくると！？」
「ゲームだから」
ボクは含み笑いを浮かべながら冷たく言い放った。こんな機会でもなければボクが彼女を負かすことなんてありえないので、大人気ないと思いつつ手を抜いたりはしなかった。
結局、選手を変えながら五試合をこなした。マーク・ハントｖｓ．中迫剛で中迫の右ハイキックをかわしたハントのロングフックが炸裂したときにはヒヤリとしたけど、結局はボクの全勝だった。
「……ふーんだ、しょせんゲームやけんねぇ」
「負け惜しみはみっともないよ」
玲央がプウッと頬を膨らませる。ボクは笑いを噛み殺した。

時計を見るとちょうど一時間くらい立っていた。部屋に戻るとＤＶＤは焼き上がっていた。インデックス画面からちゃんと再生できるかを確認して、ディスクをハードケースに収めた。
リビングに戻ると、玲央はテレビのニュースをつまらなそうに見ていた。ボクは玲央の前にＤＶＤを置いた。
そのとき、玄関のほうで鍵を開ける音がした。無意味に陽気な声がそれに続く。
「たっだいま～っ！！」
リビングと仕切りなしで繋がってるダイニングに姉貴が顔を出した。

「あー、遅くなっちゃった。――あれっ！？」
姉貴は家を間違えたように目を丸くしている。玲央は立ち上がると頭を下げて「こんばんわ、お邪魔してます」と卒のない挨拶をした。
「……こんばんわ。えーっと、亮太のお友だち？」
「道場で一緒なんだよ。ＤＶＤを貸してあげることになったんで、取りに来てんの」
「何よ、そんなにつっけんどんに言わなくてもいいじゃん。あんた、この頃、態度悪いよね」
「うっせえよ。バイトはどうしたのさ？」
「あんたに関係ないでしょ。あたし、遊びに行くけど、ゆっくりしていってね」
「バカじゃねぇの？　もう帰るに決まってんだろ。それになんだよ、これからまた出かけるって？」
「トモコんちだから変な想像しないで」
「どうだか。例のヤンキー彼氏とデートじゃねぇのかよ？」
「ホントだってば。信じないなら別にいいけど。あ、でもあんた、ママに妙なこと吹き込んだりしたらタダじゃおかないからね！」
それだけ言うと、姉貴はさっさと自分の部屋に引っ込んでしまった。
振り返ると玲央が何とも気まずそうな顔をしていた。当然の反応だ。よその家に遊びに行って家庭内の諍いを見せられれば誰だってそうなる。
「……ゴメン、気にしないで。いつものことなんだ」
玲央は何か言いたそうな顔をしていたけど、何も言わなかった。
家に帰る彼女を送っていくために、ボクは部屋に薄手のパーカーを取りに行った。Ｔシャツとハーフパンツの玲央にも何かあったほうがいいだろうと思って、クローゼットの中を引っ掻き回した。
賃貸マンションらしい薄い壁のせいで、隣の部屋の姉貴の声が聞こえてきた。携帯電話で誰かと話しているらしい。内容は聞き取れ

ないけど、声の弾んだ感じは最近付き合い始めた彼氏との会話のように思えた。さっきまで一緒にいたのに――バイトなんて嘘だ――さらに電話で話さなきゃならない理由がボクには理解できない。
出かけるときはちゃんと鍵をかけていけとドア越しに怒鳴ってから家を出た。自転車で送ろうかと思ったけどボクのマウンテンバイクは二人乗りには向かない。なので、行きは押して歩いていくことにした。
「ＤＶＤ、ありがと。お礼は何がいい？」
「今日のご飯で充分だよ。あと、ちゃんと蹴れるようになったら見せてくれれば」
「亮太、練習台になってくれん？」
「カンベンして。まだ死にたくない」
玲央がカラカラと笑う。このままずっとその笑顔を見ていたいけど、そういうわけにもいかなかった。
マンションの敷地を出たところで、玲央が急に眉をひそめた。
視線の先の路肩にライトを消した黒塗りのグロリアが停まっていた。街灯の下でも中が見えないスモークガラス。ドドドド、という不機嫌な野良犬の唸り声のようなエグゾーストが洩れている。金色のモールドと大げさなエアロパーツのおかげで品の悪い霊柩車みたいだ。
「――行こう。関わるとロクなことないよ」
ボクは玲央の袖を引っ張った。幸い、グロリアは彼女の家に向かう道とは反対側に停まっている。
向きを変えようとしたとき、グロリアの運転席が開いた。降りてきたのはクルマと同じくらい――いや、それ以上に品のない男だった。
アロハのような派手なシャツの胸元を大きくはだけていて、そこに大振りなネックレスがキラキラ光っている。スキンヘッドと言っていいほどのボウズ頭には細い刈り込みの線が何本も入っている。夜だというのに黄色いシャープなサングラス。ピアスと短いヒゲの

セットも忘れていない。全体的に痩せた感じなのに、シャツの肩周りや袖から向きだしになった部分は筋肉で大きく盛り上がっている。
ヤンキーはタバコを吹かしながら携帯電話で誰かと話していた。顔見知りではないし名前も知らないけど、まんざら知らないわけでもない。このヤンキーはボクの姉貴、三浦春香の最近出来たばかりの彼氏なのだ。
「――そいでっさぁ、ムッカついたけんあん奴、ぼてくりこかしてやったって。おう、たぶん入院しとうっちゃないか？」
声には愉快そうな響きが含まれていた。会話の内容からして、電話の相手は姉貴じゃなさそうだった。姉貴はボクや父親がＫ－１やＰＲＩＤＥを見ているだけで機嫌が悪くなるくらい、その手の荒事にアレルギーがある。
だったら、こんな男と付き合わなきゃいいのにと思うのだけど。
「あいつ、どっかで見たことある気がするとよねぇ……」
歩きながら玲央がポツリと洩らした。
「どこで？」
「それが思い出せんとやけど。まぁ、地元の不良なら見たことくらいあったっておかしゅうないけどね」
玲央はそれっきり押し黙ってしまった。何かを思い出そうとするように眉間に深いシワが寄っている。
「――えっ、俺？　今、彼女ば家まで送ったとこ。――ああ、ヒマばってんが。マジで？　行く行く！！」
品のない銅鑼声は静まり返った夜の住宅地ではよく通った。近所迷惑という単語はこの男の辞書には載っていないのだろう。それ以前に辞書を持っているかどうかすら怪しいものだけど。
ヤンキーは電話を終えるとグロリアに乗り込んだ。その場で乱暴にターンすると爆音を残して走り去った。とりあえず、姉貴がこの後、トモミとかいう友だちと一緒なのは本当らしい。
ボクらはそのまま歩き出した。やがて、大通りに出たところで玲央が口を開いた。

「ねぇ、亮太。出すぎたことかもしれんけどさ」
「なんだい？」
「亮太のお姉さんが付き合いよるヤンキーって、さっきのあいつやない？」
ボクは玲央の顔をマジマジと見た。目線が上を向くせいで何だか諭されているような気分になる。
「……どうしてそう思うのさ？」
「うーん。あいつを見よる亮太の目が、すっごく怖かったけん、かな？」
「ボクが？」
自分があいつをそんな目で見ていることに、ボクはちょっと驚いていた。

一ヵ月ちょっと前。
たぶん、向こうはボクの顔なんて覚えていないだろうけど、あの男とは顔を合わせている。初めてあいつと姉貴が一緒のところを目撃したとき、声を掛けてきたからだ。姉貴はボクに見られてまずいと思ったようだけど、あいつはそんなことは気にしていなかった。
姉貴が目だけであっちに行けと言ってきたので、ボクは適当な素振りだけしてその場を離れた。それはまぁ、どこの姉弟でもそんなに変わらない対応だと思う。
けれど、ボクは相手が姉貴の彼氏というのとは別に、見ちゃいけないものを見たような気分であいつから目を背けていた。何故、そんなことをしたのか。
有り体に言えば、怖かった。これでも要領はいいほうで、苛められたりカツアゲされたこともないけれど、自分のひ弱さ――暴力に対する恐怖心は拭えなかった。
それが微妙に変化したのは、あの霊柩車もどきを香椎駅の近くで見かけたときだった。

塾が終わって帰ろうとしていたときで、グロリアの周りにはあいつとあいつの仲間がたむろしていた。ボクがいるところは向こうからは見えづらいところだったけど、そもそも周囲を気にしている様子もなかった。

グロリアの横にはどこかの高校らしい制服の女の子が座り込んでいた。何を話しているのかまでは聞こえなかった。でも、遠目にも肩が大きく上下して、彼女が嗚咽を洩らしているのは分かった。

取り囲む男たちは下卑た笑い声を上げていた。やがて、そのうちの一人が女の子を無造作に蹴り上げた。女の子はグロリアのボディに倒れ掛かり、あいつは慌ててその子の髪を掴むと、そのまま右で殴り倒した。顔を上げたとき、女の子の鼻腔からはダラダラと血がしたたっていた。

「おう、マコト。そう言えば、おまえん新しか彼女――」

男たちの一人が口を開いた。あいつはその男のほうに向き直った。

「ハルカんこつや？」

「そうそう。あれはどがんするつもりや？」

「どがんって……まぁ、そのうち、押し倒すつもりじゃおるけど」

「あの子、結構良かとこのお嬢さんじゃなかとや？」

「お嬢さんっていうわけやなかばってんさ。でも、親はどっかの一流企業の福岡支店長とか言いよったぜ？」

「やったら、あんまり長引かせんと、さっさとやることやってカネ巻き上げたほうがよかっちゃなかとや？」

「まぁな。ま、あんまり焦って逃げられたっちゃアレやし、俺のタイミングでどげんかするよ」

「どげんかって？」

あいつはニタリと笑って腰を卑猥に前後させた。男たちは顔面を血だらけにして倒れる女の子を尻目に、ヒューヒューとそれを囃し立てる。もちろん、その場での前後運動の被害者になるのは彼女だ。

気がつくと、ボクは手のひらに爪の痕が残るほど拳を握り締めていた。

もちろん、その場で飛び出していったところでボクに何かができたわけじゃない。余計なケガ人が一人増えただけだ。彼女のためにボクにできることは警察を呼ぶことで、事実そうした。

遠くからパトカーのサイレンが聞こえてくると、あいつらは女の子を残してその場を逃げ去った。そして、その女の子も口許をハンカチで押さえながらよろめく足でその場を離れた。警察に保護されるわけにはいかなかったんだろう。たとえ被害者でも警察と関われば親や学校に連絡がいってしまう。

ボクは逃げ去った女の子と姉貴を重ね合わせていた。

たぶん、あの子はそれまであいつらを楽しい遊び相手くらいに思っていたんだろう。しかし、実際にはヒツジの皮をかぶった狼――いや、ただの野良犬に過ぎなかった。そして今、姉貴もその野良犬の群れの中にいる。

何としても、今のうちにあいつらと縁を切らせなくちゃと思った。

けれど、家に帰ったボクが見たのはあのヤンキーと楽しそうに携帯で話している姉貴の姿だった。それはどんなに愚鈍な人間でも「こりゃ話しても信じてはくれないよ」と悟ってしまうほど、姉貴は二人だけの世界の中にいた。

――どうすればいい？

ボクは眠れないまま、ずっと考えを巡らせた。

途中の公園に寄って少し休んだ。

玲央が自転車を貸してくれと言うのでハンドルを渡した。彼女は器用にマウンテンバイクを操って、前輪を上げたままホップピングで階段を下りてみせた。やったことがあるのかと聞くと、玲央は初めてだと言った。

「……まだ小さかった頃、団地のエレベータが故障して、ボクと姉

貴と二人で中に閉じ込められたことがあってさ」
　玲央は黙ってボクのほうを振り返った。
「今、思えばほんの一〇何分の話なんだけどさ。でも、中のボクらにそんなこと分かるわけないし、もう、ホントに怖くってね。今でも、そのときのことはよく覚えてるんだ」
「それで？」
「灯りも切れちゃってるから真っ暗で、ボクはもうビービー泣いちゃってさ。でもね、姉貴がそんなボクを懸命に宥めてくれて。ギュッて抱きしめたまま、ずっと「だいじょうぶだから、だいじょうぶだから」って繰り返すんだ。自分も怖かったはずなのに」
　小さかったときのうっすらとした記憶。どこまでが本当でどこからが思い込みなのか、まるで判然としない。それでも、姉貴が繰り返す「だいじょうぶだから」はしっかりとボクと心に残っている。
「だけん、お姉さんを守ろうって思って空手始めたってわけ？」
「我ながら単純だとは思うよ。そんなすぐに強くなれるわけじゃないしね。でも……後悔したくないんだ」
「後悔？」
「本当は僕の思い過ごしで、姉貴が酷い目に遭うことなんてないのかもしれない。あったとしても、そのときにボクがその場にいられるとも限らないしね。それは確かにそうなんだ。――でも、ひょっとしたら姉貴に助けが必要なとき、その場に居合わせることができるかもしれないよね」
「絶対ないとは言えんよね」
「うん。――それなのに、今のままのボクじゃ何の役にも立たない。それが嫌なんだ。後になって、ボクが強かったら姉貴を救えたのに、なんて馬鹿げた後悔をしたくないんだ」
　誰にも言うつもりはなかったのに、ボクは玲央に本心を打ち明けてしまっていた。
　玲央はボクの前に出ると、急に真面目な顔になった。睨んでいるといってもいいほど鋭い視線。

「でもね、亮太。ケンカってそがん甘かもんやなかよ？」
「分かってるよ、そんなこと」
「ううん、分かっとらんよ。道場で鍛えた立ち技の強さと路上でのなんでもありの強さはまったく別のもんやけんね。こがんこと言いとうないけど、亮太があのヤンキーに立ち向かうとは子猫が虎に噛み付くごたるもんよ。アタシは何か他の方法を探したほうがよかと思うっちゃけどねぇ」
ボクは玲央を睨み返した。
「……もちろんそうだね。ボクがやってることはただの自己満足なのかもしれない。笑いたきゃ笑ってくれても構わないよ」
ボクは自転車の玲央を追い越して歩き出した。そんなことは分かってる。でも、分かってるからって逃げ出せるはずがないじゃないか。
背後で玲央が自転車を押しながらついてくる気配がする。それがやがて、スピードを上げてボクの隣に並んだ。
「お姉さんのこと、そがん好いとうと？」
「人をシスコンみたいに言うなよ」
ボクは小さく溜め息をついた。玲央がクスッと笑う。
「見てのとおり、仲は良くないよ。顔を合わせれば文句ばっかり言ってる。でも、たった一人の姉貴だからね」
「よかねぇ、そういうと。アタシ一人っ子やけんねぇ。羨ましかよ」
「そうかな？」
「そうって。あ～あ、アタシも守ってくれる亮太みたいな弟が欲しかったぁ」
弟、ですか。
「ねぇ、亮太」
「なんだい？」
「明日から実戦的な練習、始めるけんそんつもりで準備しとって。まずはディフェンスの練習から」
「……どうしたのさ、急に？」

「だって時間がなかとやろ？　チンタラ基礎からやっとったら、あいつに勝てるくらいになった頃にはあんたヨボヨボになっとうよ？」
「いや、それはいくらなんでも言い過ぎだろ？」
「どうだか。とにかく、ビシビシ鍛えるけんそんつもりでおってね」
「マジ？　あの……どうかお手柔らかに……」
「なんで肝心なとこで気弱になると！？」
「いや、その……」
脳裏に甦るのは初めて道場で会った日のゆらゆらと揺れるサンドバッグの影だった。あれと同じ運命を辿るのは正直怖ろしい。
「まぁ、よか。そがんとこも含めて、徹底的に鍛えちゃるけんね！」
そう言って玲央はニヤリと笑った。

7. 特訓

「お～い、亮太。ちょっとよかや？」
翌日、月曜日の三時限目の休み時間。杉野がボクの教室に顔を出した。杉野はただでさえ細い目をさらに細くして意味ありげな含み笑いを浮かべていた。
「なんだよ？」
「栗原から伝言。昼休み、体育館に来いって」
……体育館？
「なんだろ、一体？」
「さあ？　俺はただ、栗原から「三浦を呼んで来てくれ」って頼まれただけやもん。――おまえ、栗原か、栗原の友だちに何かした？」
「まったく心当たりないけど。どうして？」
「今まで、栗原が誰かに呼び出されることはあっても、誰かを呼び出すこととかなかったけんさ」
杉野は無意味に声をひそめた。
「ウチのクラスの男子の間じゃ「眠れる獅子が遂に目を覚ました！！」とか言って大騒ぎになっとうぜ？」
「意味分かんないけど……。まぁ、いいや。とにかく行くよ。そう伝えて」
「分かった。俺、こっそり着いてったほうがいいか？」
「何でこっそりなんだよ？」
「俺、まだ死にとうないもん」
ボクは心の中で盛大な溜め息をついた。どうしてこんな薄情者と友だち付き合いをしてるんだろう。
「……いいよ、一人で行く」
「そうか。覚悟はできとうわけか」

杉野の中では勝手に妙なストーリーができあがっているようだった。バカバカしくて付き合っていられないので、教室の時計を指してやった。四時限目が始まるまであと二分しかない。
「そんじゃな。冥福を祈る」
「健闘を祈るの間違いだろ」
「相手が栗原なら同じことやん」
「さっさと行けよ」
ボクは手で杉野を追い払った。
二十一世紀になってずいぶん経つけど、気に入らない奴を校内の目立たない場所に呼び出すという伝統はこの学校にも残っているらしい。前の学校じゃプールの裏が不良少年・少女たちの屋外特設リングだった。ここでは昼休みの体育館がそうなんだろうか。
もちろん、玲央にそういう目的で呼ばれるはずも覚えもない。何か他の理由があるのだろう。それが何なのか、まるで見当がつかないけど。

「――おそいッ！！」
玲央はとんでもなく不機嫌だった。
体育館の一角には六メートル四方くらいにマットが敷き詰められていて、彼女はその上で軽くストレッチをしていた。学校の体操服じゃなくナイキのトレーニング・ウェアの上下を着込んでいる。足にはサポーター。手には総合格闘技で使うようなオープンフィンガー・グローブ。その真新しいブルーがやけに禍々しく見える。
「ど、どうしたの？」
恐る恐る問い掛けるボクに玲央は獲物を射殺すような視線を向けてきた。
「あんた、昼休みになったら体操服に着替えてすぐ来いって言うたろ？　あと、給食は食べるなって！」
「えーっと……そうなの？」

杉野とは後でキッチリ話をしておかなければなるまい。度し難いお調子者なのは知ってたけど、伝言も満足にできないとは思わなかった。
「と言うか、何でボクが給食を食べてきたって分かるのさ？」
「シャツの胸にケチャップが跳ねとうやん。あのね、そういうのてなっかなか落ちんとよ？」
「中学生とは思えない発言なんですけど……」
玲央はボクの指摘をあっさり聞き流した。
「とにかく、始めるけんね」
「何を？」
「昨日、明日から実戦的な練習始めるって言うたやんね！」
「えーっ、ここで！？」
ボクは思わず大きな声をあげた。
その拍子に体育館の窓越しに空気がざわつくのを感じた。外にはかなりのギャラリーがいるようだった。杉野に呼び出しなんかやらせるのは、メガホンを持ったサンドイッチマンに伝言を頼むのと同じだった。
「ちょっと待ってよ。練習は道場でやるんじゃないの？」
「冗談やろ。あんたが道場で練習しよる間、誰がお姉さんを見張ると？」

――なるほど。そういうことか。

昨日、家に帰る道すがら、ボクと玲央はどうやって姉貴とあいつを見張るかについて話した。玲央を巻き込みたくはなかったけど、彼女はそれが当たり前のようにアイデアを出してきた。
実際のところ、あの二人はそれほど頻繁に会っているわけじゃなかった。姉貴の高校は意外と厳しくて、親が休みの届けをしない限り、休んだ生徒の家に電話がかかってくるからだ。つまり、週五日の朝から夕方までと土曜の昼までは問題ない。

それに姉貴はボクと同じく香椎にある塾に通っている。ここはさらに厳しくて、サボれば間違いなく親へ連絡が行く。ここが火、木、金の週三日。女の子一人での電車通いは危ないという理由で、終わると母親が迎えに行くことになっている。今は母親は不在だけどその間は父親が行くはずだ。したがって、塾がある日に二人が会うことは不可能だ。

問題は残りの四日だった。

この四日のうち、日曜以外の三日は夕方六時から一〇時までは家の近くのコンビニでアルバイトをしている。あいつとの接点があるとすればここだ。出会ったのもおそらくはここじゃないかとボクは睨んでいる。

ただ、バイトが終われば姉貴はすぐに家に帰らなくてはならない。一度、そのまま友だち（女）の家に行って遅くなり、今度やったらバイト禁止を言い渡されているからだ。それにコンビニ周辺には人の目がある。ボクが夜の通りで見たような事態にはならないだろう。

つまり、問題になるのは土曜の午後と日曜日。

「でもさ、バイトは休んだって親に連絡行かんよね？」

「そうだけど、じゃあ、どうすればいいんだよ？」

「手っ取り早いとはバイトしよるはずの時間帯に店に居座ることやけど……まぁ、そういうわけにはいかんよね。遠巻きにでも見張るしかないっちゃないかな。幸い、あんたは道場に行っとる時間やけん、その間は出歩けるし」

「なるほどね」

道場に払った月謝がもったいないけど、そんなせこいことを言ってる場合じゃなかった。

「でもさ、だったら、ボクの特訓はどうなるのさ？」

「うーん……それはちょっと考える」

その考えた結果が昼休みの体育館というわけらしい。

「そういう理由なら、こんな「真昼の決闘」みたいなことしなくて

もよかったんじゃないか？」
「そのほうがウケるやろうって思って」
「……誰に？」
「外で見ようギャラリー」
玲央が窓の外に向かって顎をしゃくる。いつまでたっても殴り合い――というか、玲央による一方的な攻撃が始まらないので、外のギャラリーの空気がダレ始めている。何を期待してるんだか。
「秘密にしとったってどうせ知れ渡るし、それなら最初からオープンにしといたほうがウダウダ言われんで済むけんね。学校側にはあんたがウチの道場に入ってきたけどまるでダメなんで、特別に稽古をつけてやってるってことになっとうとよ」
何ですと？
「空手のこと、みんなにしゃべったのか？」
「しょうがないやん。そうせんと体育館使わせてもらえんし。あ、みんなに在らぬ誤解されんように、あんたは空手を教えてあげる代わりにアタシの宿題とか面倒なことをやらせる子分ってことになっとうけん、話合わせとってね」
「マジかよ……」
在らぬ誤解をされるほうが三〇〇倍くらいマシなんだけど、言っても始まらなかった。玲央の態度に一片の悪意も感じられないのがボクの憤りを行き場のないものにしてしまっていた。
「何か、質問は？」
「……ないよ」
「オーケー、じゃあ、始めよっか」
着替えに戻る時間がもったいないからとりあえず靴下を脱げ、と言った。ボクは言われた通りにした。
その間に玲央はダンスのような軽やかなステップでシャドウ・ボクシングを始めていた。左のダブルから右、そして左のボディアッパー。軽くバックステップしてから、左にサークリングしながら軽快に矢のようなジャブを集める。

閃光のようなハンドスピードだった。一発一発に体重を乗せて撃ち込む空手の突きより、手数を放つこの手のパンチのほうが彼女に向いているような気がした。実際、彼女は突きはあまり得意でもないし好きでもないと言っていた。
「へへっ。付け焼刃にしてはサマになっとうやろ？」
呆然と見つめるボクに玲央は笑いかけた。
「そうだけど……。どうしたのさ、いきなり？」
「あのヤンキーがどんなスタイルかは分からんけど、ちょっとでも対策しといたほうがよかけんね」
そう言えば玲央はあいつをボクサーだと言っていた。
「だからボクシング？」
「そう。実はウチの半居候が元ボクサーなんよ。で、ご飯すっぽかした罰にちょっと教えてもらったってわけ」
玲央は事も無げに言う。しかし、それはいくら彼女が格闘技に関するセンスに恵まれていても、口で言うほど簡単なことじゃないはずだ。よく見ると玲央の目は充血していた。ひょっとして寝不足になるくらい練習したんだろうか。
玲央はもう一度、グラブを打ち合わせた。
「さ、おしゃべりは終わり。あんまり時間ないとやけんね」
「分かった」
ボクは首を軽く回して肩を上下させた。そして、ゆっくりと一礼してからマット――いや、リングに上がった。

8. 賭け

「……いててて」

一晩中、冷却用のジェルシートを貼っていたにも関わらず、目の周りの腫れはまったく引いていなかった。

時計を見た。七時半。もぞもぞと起き上がって剥がしたシートを丸めて屑籠に放り込んだ。

昼休みのスパーリングが始まって――水曜からはそれに放課後が加わった――昨日でまる五日が過ぎた。

もともと運動慣れしていないボクの身体は悲鳴を上げていた。さすがに筋肉痛のピークは過ぎたけど、身体が水を吸った砂袋のように重い。

鉛のような脚を引きずって顔を洗いにいく。水のひんやりした感触がある間だけは痛みを忘れることができるけれど、タオルで拭えば擦れて痛みがぶり返す。だからって顔を拭かないわけにはいかない。他人の顔に触れるように、そろそろとタオルに水気を吸い取らせた。

意を決して、鏡に映る自分の顔を覗き込んだ。

唇の端は切れて青黒くなっている。目の周りに限らず、顔中の皮膚がグローブで擦られて真っ赤だ。顎のちょうつがいの部分もなんだかガタがきているようで、顔全体が歪んでしまっているような気がする。

顔も最悪だけど身体はもっと悲惨だ。上半身の前半分でパンチを受けていないところは一箇所もなかった。鳩尾と脇腹にだけは絶対に喰らうなと言われたので意識してガードしたのに、覚えているだけでも鳩尾に三発、脇腹にいたっては五発も喰らってしまっていた。

玲央が放つのは手数とスピード優先の軽いパンチ、いわゆる手打

ちだ。おまけにグローブも初日以外は練習用の柔らかいものを使っている。だから、当たったところで単発ではそれほどのダメージはない。被弾したところにはじけるような傷みを残していくだけだ。
ただ、それでも何発も喰らえばやがては身体の芯まで響いてくる。逆に言えば、それだけボクが玲央のパンチを避けきれていないということだ。
「ちょっと、亮太ッ！　あんた、休みだからっていつまでも寝てんじゃないわよッ！！　――あれっ？」
ボクの部屋のほうで姉貴の声がする。自分が学校に行く日にボクが休みなのが気に入らないらしい。逆のときは何があっても起きないくせに。
「……なんだよ、とっくに起きてるっつーの」
ダイニングに入っていくと朝ご飯が並んでいた。チーズトーストと巣篭もり卵、ポテトサラダ。姉貴が作るご飯はガスレンジを使わないのが特徴だ。トーストはマヨネーズとチーズをのせてトースターへ。巣篭もり卵は袋売りの千切りキャベツに卵をのせてラップして電子レンジへ。ポテトサラダは惣菜屋のパックから移すだけだ。今まではそれが当たり前だと思っていたけど、あれだけ料理をこなす中学三年生を見ると姉貴がものすごい手抜き女に思えてならない。
早く母親に帰ってきて欲しい気がしないでもない。ただ、帰ってきたところでそれほど食卓事情が改善するわけでもない。姉貴が料理が下手なのは母親譲りだからだ。
ダイニングに戻ってきた姉貴は、腹立たしそうに手にしてたフライパン――ボクの部屋に持っていって何するつもりだったんだ？――を食器洗浄機に突っ込んだ。
「早くご飯食べちゃってよ。片付けらんないじゃない！」
「いいよ、自分でやっとくから」
ボクは冷蔵庫から牛乳のパックを取り出してマグカップに注いだ。
「父さんは？」
「休日出勤に決まってんでしょ。今週、あたしの送り迎えのために

残業できなかったからって。ホント、一に仕事、二に仕事、三、四も仕事で五が巨人なんだから」
「家族は？」
「一〇番目までに入ってるといいけどね。あ、あたし、模試があるから今日は遅くなるわよ」
「へぇ、そう。バイトは休み？」
「ううん、それには間に合うように帰ってくる」
大学入試の模擬試験の会場が博多駅前の大手予備校なのは事前に確認済みだ。午前中は学校だし、今日はちゃんとバイトに出てることを確認すれば、あとはゆっくりできそうだ。
「それにしてもあんた、ちょっとやり過ぎなんじゃないの？」
姉貴はボクの顔を見ながらしみじみと言った。
「何がだよ？」
「カツアゲに遭ったみたいよ。ナニ考えてんのかしらないけど、空手なんてやめたほうがいいんじゃないの。あんたみたいなもやしっ子にはムリだって」
「うっせーな。さっさと学校行けよ」
自分でも意外なほどドスが効いた声だった。姉貴は「……何よ、心配してやってんのに」とブツブツ言いながら席を立った。
姉貴が出て行くのを見送ってから、テレビを横目にテーブルの上のものを胃に詰め込んだ。あまり食欲はなかったけど食べないと身体が持たない。食べ終わった皿をサッと洗って食器洗浄機に押し込んだ。
振り返ると食器棚のガラスにボクが映っていた。寝起きというだけじゃない冴えない表情。瞼がボンヤリ腫れ上がっているせいでやけに膨れっ面に見える。姉貴が言ったようにこれじゃまるで虐められっ子だ。

＊　＊　＊

「とりあえず、受けは捨てるから」
初日の月曜日。練習開始の開口一番、玲央はあっさりと言い放った。
「ちょっと待ってよ。ディフェンスの練習だって言わなかった？」
「言ったよ？」
「だったら、まずは受けからやるもんじゃないの？」
玲央から実戦的な練習をやると言われて、実は昨夜、ボクはあらためて空手の入門書を読み返していた。もちろん本なんか読んだって技は身につかないけど、理屈を分かっていたほうが少しでも覚えがよくなると思ったからだ。
「あんたがやるんが空手の試合なら、それでも良いとやけどねぇ」
反論は予想していたのか、玲央の声音に変化はない。実は「口答えするな！！」とか一喝されるだろうと思ってビクビクしていたのだ。
「どういう意味だよ。相手がボクシングだって同じだろ？」
「じゃあ訊くけど、相手がメリケンサック嵌めとったらどうすると？」
「それは……」
ボクは答えに詰まった。玲央は腰に手を当てて、出来の悪い弟子に言い聞かせるようにボクの顔を覗き込んだ。身長差を埋める為に彼女が前かがみになっているのが余計にボクの劣等感を刺激した。
「いい？　路上のケンカじゃ相手の攻撃はぜんぶかわすのが基本。ブロックは避け切れんかったときの緊急避難。みんなが見よる前でのタイマンならあんまり卑怯な真似もできんけど、あんたが相手にしようとしとうとはメリケンサックどころか、ナイフ出してきてもおかしくない性質の悪いヤンキーなんよ。あんた、防刃ジャケットか何か着て闘うつもり？」
「……ごもっともです」
「まぁ、ホントはそれでも防御から入るべきっちゃけど、あんたの場合は時間ないけんね」

「分かった。で、どういう練習をするんだい？」
「アタシがパンチを撃つけん、あんたはそれをかわしながらアタシが出した手を捕る。そんだけ」
「それだけ？」
「かわすんだってホントはそれなりの技術が要るとよ。でも、それを系統立てて身に付けるにはやっぱり時間が足りんしねぇ。だったら、少しでもパンチを見ることで経験を積むしかないやん？」
確かにそうだった。
「手を捕るっていうのは？」
「出した手を狙われるっていうんは嫌なもんよ。あんた、吼えながら噛みついてくる犬の鼻面、殴れる？」
「なるほどね」
それだって相手のハンドスピードについていけなければ同じことだけれど、それを言ったら対策は何もないことになる。要は玲央のパンチを見ることで少しでも距離感やタイミングをつかめということだ。
「ボクサー対策っていうから、ロー・キックの練習とかやるのかと思った」
「相手は蹴ってこんけん、ローで出足を潰せばオーケーってヤツ？」
「……違うの？」
玲央は少し小馬鹿にしたように口許をゆがめた。
「よっぽどの実力差があるか、そいつがボクシング始めて間もないとやったら有効かもしれんけどねぇ。蹴りを使えんけんって自由に脚を蹴らせてもらえるほど、ボクサーの攻撃範囲は狭うなかよ。アウトボクサーならかわされるし、インファイターならステップインで入ってこられるし。蹴り終わりは棒立ちでいい的やしね」
パンチは移動しながら撃てる。でも、蹴りは基本的に足を止めないと撃てない。しかも蹴り足を戻すまでは片足立ちになる。玲央が言ってるのはそういうことだった。
玲央は時計にチラリと視線を送った。グローブの手のひらをわざ

と大きな音を立てて打ち合わせる。
「さ、おしゃべりは終わり。さっさと始めるよ。――あ、そうだ。せっかくやし、賭けん？」
「賭け？」
「そ。あんたがこの一週間で一回もアタシの手を捕れんかったら、アタシの言うことを何か一つきくっていうのは？」
「なんだい、それ。じゃあ、もし捕れたら？」
「そのときは――アタシも何か、亮太の言うことをきいてあげる。あ、でも、あんまり変なのはナシね」
いくらボクが素人だからってそれは舐め過ぎだ。ボクはちょっとムッとしていた。いくら何でも一度も捕れないことはない。
ボクはオーケーと答えた。

＊　＊　＊

しかし、ボクはそれから一度も玲央の手を捕まえることができずにいた。
もちろん瞬間的に触れることはできるし、何度かはパンチをもらう覚悟で組み付いたりもした。ところが女の子とは思えない力で振り切られるか、反対側のパンチを喰らって押し戻されてしまうのだ。
――相手の軸線上で勝負してどうすっとねッ！！
玲央の叱咤が脳裏に甦る。
バックナックルを除けばどんなパンチも身体の軸線上にしか体重を乗せては放てない。さらにフックは身体の内向きにしか放てないので、いきおい、パンチをかわすには相手のリードパンチの外側に移動して、身体を開かせることが重要になってくる。
理屈としては分かる。ただ、分かっていることと実際にやれることとの間には天地の開きがあった。

タイムリミットまであと二日。
別に玲央にボクの言うことをきかせたいわけじゃない――変な妄想をしたことは認める――けれど、一週間も付きあわせておいてまったく進歩がないというのも恥ずかしいというか、情けない話だった。今日こそ成功させてやろうとボクは目を閉じて玲央のパンチを思い浮かべた。
そういえば今日の練習をどこでやるのかを聞いていなかった。電話しようと部屋に戻ったところで、携帯が鳴った。着メロは宇多田ヒカルの〈ｔｒａｖｅｌｉｎｇ〉――玲央からだ。
「もしもし？」
「起きとった？」
声が少し弾んでいる。朝練でもしてたんだろうか。
「ついさっき。どうしたの？」
「うん、ちょっとね。今日のお姉さんの予定は？」
「午前中は学校、午後は予備校で模試。夕方からはバイト」
「そっか。となると、怪しいのはその後ってことかぁ」
そうだねと答えかけて、何かが引っかかった。
「どうして？」
「えっ？　あ、いや、そうかもって思っただけ。ホラ、夜遊びさせんようにしようにもお母さん帰ってこんし、お父さんはまったく期待できんって言うたやん」
「……そうだけど」
姉貴に甘い父親はこの際、夜遊び防止装置としてはまったく役に立たない。実は水曜日の夜、敵が「ちょっと友だちのところへノートを借りに行く」とほざいて、バイト先からの帰宅時間を引き延ばそうとしたのだ。あっさり「いいよ」と答えそうになった父親の後ろで、ボクが「母さんから電話だけど何か伝えることある？」と怒鳴ったから、渋々諦めて帰ってきたんだけど。
自分で言うのもなんだけど嫌な奴だな、ボク。
「ところで亮太、今日は予定あると？」

「ないよ。っていうか、今日はどこで練習するのさ？」
「それなんやけど、ちょっと目先を変えるっていうか――プール行かん？」
「はぁ？」
そりゃまた唐突な。
なんでも、玲央のお祖父さんの会社がお付き合いで入っているスポーツクラブが今泉――天神の周辺らしい――にあるんだけど、誰もカードを使わなくて勿体ないということで彼女に回ってきたらしかった。ちょうど二枚あるので一緒に行かないか、ということだった。
いくらダラダラ暑くてもさすがにプールという季節じゃないけど、身体が痛いのもあるし、何より玲央の水着姿が見られるとあっては断る理由なんてどこにもない。
「街中かぁ。この前みたいに香椎からバスで行く？」
「ううん、アシがあるから大丈夫。今から迎えに行くけん、準備しとってね」
玲央はそう言うと返事を待たずに電話を切った。
アシ？
誰だろう。写真に映ってた〈あいつ〉だろうか。そう思うとちょっとだけ渋い気分になる。
でも、玲央はカードは二枚だと言った。仮に送り迎えがあいつだとしても一緒にプールに行くのはボクだ。それにあいつも玲央のお父さんと同じ警察官なら、そんな一日中、時間が空いてるわけでもないだろう。
お祖父さんあたりじゃないかなと思いながら、ボクは水着を押し込んだクローゼットを引っ掻き回しにかかった。

9．休息

マンションの敷地の木陰で、玲央はボクを待っていた。
それはいい。問題はその傍らに真っ赤なバイクが停まっていることだ。玲央の腕には黄色と黒のラインと〈４６〉の番号が入ったヴァレンティーノ・ロッシのレプリカ・ヘルメットが通されている。シート横のフックに引っ掛けてあるもう一つのヘルメットもデザイン違いのロッシ・モデルだ。
「ねぇ、ちょっと訊いていいかな？」
ボクの問いに玲央は白々しいくらいキョトンとした顔を向けた。
「なに？」
「君、ボクと同じ中学生だよね？　それ、いったい何？」
「スズキのバンディット２５０。カッコよかろ？」
「そうだね……ってそういう問題じゃないから」
そのバイクは確かに格好良かった。カウルのないネイキッドと呼ばれるタイプで、ボディ・フレームを構成する鋼管がそのまま流れるようなデザインのテールエンドにまで繋がっている。タンクには筆記体のような書体の〈Ｂａｎｄｉｔ〉というロゴが見える。
「どうしたの、これ？」
「父さんのバイク借りてきた。友だちと遠出するけんって言うたら、あっさりオッケーって」
「君のお父さん、警察官だよね？」
「たぶんね」
玲央はボクの疑問をさらっと受け流すと、何事もなかったように「行こっか？」と言った。フックから外したヘルメットをボクに押し付けて、自分のヘルメットを被るとさっさとシートにまたがる。
いくぶんの――いや、かなりの――心配がなくはないけどここで

ゴネても仕方ない。ボクもヘルメットをかぶって彼女の後ろに乗った。

腰に手を回していいものか迷ったけど、振り落とされたくないのでそっと手を回した。ウェストにはまったく無駄な肉がなかった。これで本人は太りやすいとか寸胴だとか言うんだから女の子の気持ちは理解できない。

「じゃあ、行くよ」

「オーケイ。安全運転でよろしく」

「努力する」

「なんだよ、努力って？」

返事を待たずにエンジンが始動した。土浦の従兄が乗ってた四〇〇ＣＣに比べると一回り小っちゃいけど、それでも野太い排気音には充分な迫力があった。無免許だというのが信じられないくらいスムーズに、ボクらを乗せたバンディットは道路に飛び出した。

走り出してしまえば捕まるとか捕まらないとか、そんなことはどうでもよくなった。風を切る音で会話はまったくできないけど、二人で一つの空間を共有しているということがボクの胸を熱くしていた。前後が逆だったらよかったのになと少しだけ思った。

何かを感じたのか、玲央は首をほんの少しだけ後ろに向けて小さくうなずいた。

スポーツクラブは薬院（やくいん）六つ角の近くにあった。天神の南側、文字通りの繁華街の一角だけど、裏通りに入れば意外なほど静かだ。玲央は手慣れた様子で駐輪場にバンディットを突っ込んだ。運転技術を見ても分かるように彼女が日常的に無免許運転をしているのは間違いない。

入館料を払って更衣室に入った。さっそく着替える。学校で使う水泳パンツでは情けないので、海水浴に行ったときのサーフパンツにしていた。タオルとスイミングキャップ、ゴーグルを持ってプールに向かう。

スポーツクラブに来るのなんて初めてで、どういう態度でいればいいのかなんて分からなかった。プールサイドにいるのはみんなボクらよりずっと年上で、一番近そうな人でもやたら筋肉質の大学生だった。水泳部の人なのか、競泳用のブーメランみたいなパンツだった。恥ずかしくてボクにはとても履けそうにない。履いても似合わないだろうけど。

ビルの二階にあるとは思えない広々としたプールには秋晴れの陽射しが差し込んでいた。それがゆっくりと揺れる水面に反射してキラキラと光っている。学校のプールみたいに消毒液の匂いがするものだと思っていたけど、そんなことはなかった。ボクはプールサイドでストレッチをしながら、玲央が出てくるのを待った。

未だかつて、これほどドキドキしたことがあっただろうか。どんな水着で出てくるんだろうとか、ひょっとしてスクール水着だったらボクだけそうじゃないのは悪いかなとか、ひたすらどうでもいい考えが頭の中をグルグルと駆け巡る。

「――亮太！！」

玲央の声がボクを呼んだ。振り返るとこっちに小走りに駆けてくる彼女が見えた。

声が出なかった。

胸元にＳＰＥＥＤＯのロゴが入ったブラックのワンピース。サイドにブルーの幅広のラインが入っていて、ただでさえ長身の玲央をよりスマートに見せている。残念ながら胸の起伏にはちょっと欠けるけれど、そんなことは気にならないほど彼女は魅力的だった。

「お待たせー。更衣室が混んどったけん、時間がかかったとよ」

「プールサイドを走ると危ないよ」

ボクは素っ気なく言った。玲央はちょっとムッとしたように口を尖らせた。

「ふーんだ。亮太ってホント、小言が多いって」

「どうせ若年寄だよ、ボクは」

そっぽを向くとどうしてもぶっきらぼうな物言いになる。もちろ

ん、気に入らないことがあるわけじゃない。彼女のほうを向いていたら、視線を引き剥がすことができなくなりそうだったからだ。
玲央はそんなボクの気持ちになんてまったく気づいちゃいなかった。彼女はストレッチもそこそこに水中に身体を滑り込ませた。
「玲央！　ちゃんとゴーグルしないと！」
「えっ！？　あ、そうやん、忘れとった！！」
玲央は弾けるように笑う。ボクはその笑顔を――それと彼女の水着姿を――懸命に目に焼き付けようとする。

「――ふわあ、楽しかったぁ」
上気した玲央の顔はほんのりと赤く染まっている。おかげで手元のジンジャーエールがまるでビールに見える。普段は甘いものを飲まないという彼女も、さすがに運動のあとはコーヒーじゃないらしい。
「はしゃぎ過ぎだってば。周りのひとが睨んでたよ」
「そんなん、楽しんだ者勝ちって。気にせん、気にせん」
玲央はパタパタと手を振ってみせる。
ボクらはスポーツクラブを出て、すぐ近くにある玲央のお祖父さんの会社が入ったビルにいた。法人会員のカードを返さなくちゃならなかったのだ。
返したらそのままお昼を食べに行くつもりだったんだけど、お祖父さんに「来客が終わるまで待っとけ」と言われて、ボクらは場違いにも社長室に通されていた。社長の孫娘とその友だちということでジュースを運んできてくれた事務のお姉さんもなんだか畏まった感じだった。
玲央はその場にあったスポーツ新聞を広げていた。野球もサッカーもあんまり興味がないと言っていたから、たぶんプロレス欄を読んでいるんだろう。
「君っていいとこのお嬢様だったんだね」

玲央は紙面から顔を上げて、ちょっとだけはにかんだ。
「意外？」
「そんなことないけど。――でもさ、君のお祖父さんってすごいオーディオ・マニアなんだね」
「まぁね」
ボクは部屋の一角にある高級そうなオーディオ・セットを眺めた。アンプにはＳＡＮＳＵＩ、スピーカーにはＪＢＬのロゴが燦然と輝いている。よく見るとラックの中のメーカーはバラバラだった。本当のマニアはメーカーのフルセットじゃなくて、パーツごとにそれぞれのトップメーカーのものを揃えたがるという話を聞いたことがある。そういえば玲央のコンポも中学生にしては贅沢な代物だった。彼女が音楽にうるさいのは血筋なのかもしれない。
「どんなの聴くんだろ。やっぱりクラシックとか？」
「クレイジー・ケン・バンド」
「……えっ？」
「正直どうよって思うけどねー。まあ、老い先短い年寄りの楽しみやけん、好きなごとさせとこうって」
確かに、ＣＤプレイヤーの前には〈ＧＲＡＮ　ＴＵＲＩＳＭＯ〉のド派手なアメ車のジャケットが立て掛けてあった。玲央がリモコンに手を伸ばすとスピーカーからタイトル・チューンが流れ始めた。このメロディ・ラインが時代を先取りしてるのか、それとも時代遅れなのか、ボクにはよく分からない。
「おう、待たせたな」
玲央のお祖父さんは〈ＧＴ〉のリフレインにあわせるように口笛を吹きながら部屋に入ってきた。
面長で鼻筋が通っているところは玲央のお母さんと似ている。でも、目元が鋭いところはむしろ玲央のほうに引き継がれているような気がした。フサフサの真っ白い髪と口ひげ、サックスブルーのシャツと緩めたネクタイ、白っぽいベージュのスーツの組み合わせ。これに麦わら帽子とサングラスがあればハワイ旅行のパンフレット

のモデルが勤まりそうだ。少なくとも建設会社の社長には見えない。
「いったい何ね？　わけも言わずに待っとけとかさ」
玲央はいきなりつっけんどんな口調だった。お祖父さんは生意気な孫娘を横目で睨みながらボクの近くまで歩いてきた。
「二人で何か美味かもん食べに行かれるごと、小遣いやろうかと思ったとさ。それに玲央がボーイフレンド連れてくるとか初めてのことやけんな。ちゃんと挨拶しとかんといかんやろ？」
「変なこと言わんで」
なんだよ、変なことって。
ボクはソファから立ち上がって、ちょっと緊張しながら挨拶した。お祖父さんはニッコリと笑って手を差し出した。そんなにガッシリした感じでもないのに節くれだったとても力強い手だった。
玲央は握手の様子を膨れっ面で見ていた。
「お小遣いくれるんなら早うちょうだい。お祖父ちゃん、そんなヒマと？」
「おまえ、それが人にモノば頼む態度か？」
お祖父さんは顔をしかめた。
「昨日も急に「明日、プールに行くから法人カード貸せ」とか言い出すし。おかげで総務のお局さんたちがエアロビに行かれんかったとぞ」
「えっ？」
思わず言葉が洩れた。今朝の電話の口ぶりではたまたま借りられたような感じだったし、それも、誰も使わないから勿体ないという話じゃなかったっけ？
目をやると玲央は挙動不審な目の逸らしかたをしていた。その様子を見て、お祖父さんはニタリと意地悪そうな笑みを浮かべて咳払いした。
「玲央、スポーツクラブのプールでデートとか、中学生にしてはなかなか洒落とうやないや。おまえも母親に似て男っ気んなかけん心配しとったけど、こげん立派な彼氏ば連れてくっとは驚いたぞ」

「ちょっとッ！！」
玲央は露骨に狼狽えていた。
「違うとや？　わしはてっきりそうって思っとったとに」
「バ、バ、バカなこと言わんでよッ！！」
「おいおい、バカなこつってなんや。彼氏に失礼やろ」
「やけん、彼氏やなかってッ！！」
ボクとしては彼女の狼狽っぷりが微笑ましく思える反面、そんなに激しく否定しなくてもいいじゃないかとも思う。
「二人のツー・ショット撮って良かか？　祖母さんに見せたら泣いて喜ぶぞ」
「だけん、人の話を聞かんねってッ！！　もう耳が遠くなっとうとッ！？」
「おまえ、相変わらず素直やなかなぁ。わしにとぼけたってしょうがなかやろうに。なぁ？」
最後の「なぁ？」はボクに向けられたものだった。同時に玲央のきつい視線が飛んでくる。ボクは「あははは」と曖昧極まりない苦笑いでその場をやり過ごした。他にいったい何ができるというんだ？
それからしばらく、玲央とお祖父さんは掛け合い漫才のような言い合いを繰り広げた。
「ホント、そろそろボケが始まっとうとやないと？」
「バカ言えって、おまえほどやなかよ。そういえば真司くんから聞いたばってん、おまえ、こん前の試験ボロボロやったらしかな？」
「うっ……」
「栄養が脳みそやなくて、身長にばっかり行っとうとやないとや？」
こう言っちゃなんだけど、彼女の成績はそう言われても反論できないレベルだ。決して頭が悪いわけじゃないし、知恵も回る――特に悪知恵が――のに、どうしてあそこまでペーパーテストに弱いのかはちょっとした謎だ。
「せっからしかね、そがんことなかってッ！！」
玲央はいよいよ顔を真っ赤にして反論した。ボクの存在は完全に

忘れ去られているようだ。お祖父さんの悪党めいた笑みがますます深くなる。
「そがんこつあるって。それにおまえ、乳もぜんっぜん大きゅうならんなぁ。まったく、頭が悪かだけならともかく、そがんとこまで母親に似らんでちゃよかろうに」
「知らんって、このエロ爺ィ！！」
「おまえ、自分の祖父ばつかまえてエロ爺ィっちゃなんや。わしの示現流の餌食にしちゃろうか！？」
「やれるもんならやってみらんねッ！！」
おいおい、本気かよ。
お祖父さんがステッキを手にし、玲央がテーブルを叩いて立ち上がろうとしたとき、一ラウンド終了を告げるゴングのように電話が鳴った。
お祖父さんは玲央を手で制して受話器を取った。深い皺が刻まれた顔が急に真顔に変わった。どうやら仕事の話、それもちょっと真剣な話のようだった。
「行こうか？」
ボクは言った。我に返った玲央がうなずく。
お祖父さんは受話器を肩と首で挟んだまま、財布から札を抜いて玲央に手渡した。玲央はひったくるように受け取った札を無造作にポケットに突っ込んだ。
社長室を後にしてエレベータに乗った。バンディットを停めてある地下一階のボタンを押した。玲央の頬にはまだ興奮の名残りの赤みが残っていた。
「カード、わざわざ借りてくれたんだ」
「へっ！？」
聞いたこともない裏返った声。否定の言葉を探していたようだったけど、やがて、玲央は諦めたように短く息をついた。
「……筋肉痛が出てくる頃かなって思うたし、稽古も行き詰ってる感じやったけんね。少し気分転換したほうがよかかなーって思って」

「そう。――ありがと」
玲央はしばらく押し黙っていたけど、不意に別人のようにニッコリと笑った。
「ね、何食べる？」
「ボクは何でもいいけど」
「じゃあ、お鮨食べに行かん？　ソラリアの近くに美味しいとこがあると」
「高いんじゃないの？」
「だーいじょうぶ。軍資金はたっぷりあるけん」
玲央はさっき受け取っていたお札をボクの目の前で広げた。せいぜい五千円だと思っていたら一万円札だった。
「いいの？」
「いいって。あのじじいも二人で美味いものを食えって言うたやん。――あ、でも、一つだけ条件があるけど」
「……条件？」
「今日、二人でプールに行ったんはナイショ。誰にも言うたらダメ」
ボクは玲央とのデート――全否定されてたけど――を自慢すらしたい気分だった。でも、彼女がそう言うのならそうせざるを得ないだろう。
「りょーかい。誰にも言わない」
「約束できる？」
「もちろん」
指きりでもさせられるかなと思っていたけど、そこまで子供っぽいことは言わなかった。
代わりにボクは拳を握って彼女に突き出して見せた。玲央はニヤリと目を細めて、ボクの拳に自分の拳を軽く打ち合わせた。

10．覚悟

玲央が連れていってくれたのは天神（てんじん）のど真ん中にある有名な店だった。

一階は回転寿司だったのでそっちに行くのかと思ったら、玲央は迷うことなく上の階のお店に入った。そこでボクらは店員さんの不審そうな目を物ともせずに一番高い上にぎりをたいらげた。

「うっわ、美味しいねぇ」

「やろ？」

玲央は少し得意げだった。

転勤族の我が家には馴染みの鮨屋なんてないし、おまけに魚嫌いの父親のせいで、たまに回転寿司に行く以外は鮨を食べる機会はない。ボクがそう言うと玲央も「アタシもそんなにしょっちゅう食べるわけじゃなかけどね」と言った。彼女の場合、誰かと一緒にご飯を食べること自体が滅多にないらしかった。

支払いを済ませて街中をブラブラと歩いた。

「これからどうする？」

「もうちょっと遊んでいこ。いいやろ？」

まだ二時を少し回ったところだった。姉貴の模試が確か四時ごろに終わる。六時のバイトに間に合うように帰るには寄り道をしてる余裕はないはずだ。五時くらいまでに家にいれば大丈夫だろう。

「どこ行く？」

「亮太が行きたいとこでよかよ」

「急にそんなこと言われても、よく分かんないけど……。そうだな、福岡タワーには行ったことないや」

「ゲッ！？」

玲央はどこから出したのか訊きたくなるような妙な声を出した。

「どうかした？」
「う、ううん。何でもない。えー、福岡タワーねぇ……」
玲央の目が見たことないほど泳いでいる。何となくその理由が想像できた。
「ひょっとして、玲央って高所恐怖症？」
「そ、そがんことなかって。ホラ、言うやん、馬鹿と煙は高いところが好きって」
「嫌なら別のところでもいいよ。マリノアの大観覧車とか」
「一緒やんねって！！」
玲央が思わず突っ込む。やっぱりそうなんだ。
ジットリした視線を受け流して、ボクは玲央の目を覗き込んだ。我ながら嫌な奴だと思いつつも自然と笑みがこぼれる。
「ホラ、例の賭けあるよね。ボクが玲央のパンチを捕れたらって奴」
「それが？」
「ボクが勝ったら福岡一日高所巡りツアーなんていいかもしれないなー、とか思って」
「サイテー」
玲央はちょっとむくれている。ところが、彼女は何かを思いついたようにパッと表情を輝かせた。
「でもさ、それは亮太が賭けに勝ったらってことやし、要はアタシが手を捕らせなきゃよかわけよね？」
「そうだけど？」
「よし、今度から本気でやろうっと」
あれで本気のスピードじゃなかったのかよ。
「それって元々の練習の趣旨から外れるんじゃないの？」
「いいと、アタシの身の安全が第一なんやけん」
「そういう問題じゃないような気がするけど」
「せからし。亮太って優しそうな顔しとうくせに、意外とイジワルとね～」
玲央は顔をしかめて、思いっきり舌を出した。

そんなわけで若干の言い合いの末、ボクらは福岡ドームに行くことになった。玲央は天神から大通りじゃなく細かい裏道を縫うようにバンディットを走らせた。

「玲央ってホントによく道を知ってるよね」

「アタシ、一度通った道は忘れんとよね。自分の運転だけやなくて、助手席に乗ってても覚えるとよ」

「こんな道、誰が走るんだよ」

玲央はさっき、クルマと歩行者がすれ違えない――どうでもいいけど、このクルマのすれ違いのことを福岡では離合という――ほど狭い道を走っていた。

バンディットは唐突に大きな川沿いに出た。橋のたもとには室見川（むろみがわ）という看板があって、河口のほうにシーホークホテルと福岡ドームのてっぺんが見えた。

ここも前を通ったことがあるだけで、ちゃんと敷地に入ったことはなかった。ドームの手前にあるショッピングモールにバンディットを停めて、ドーム前のエスカレータに乗った。薄いレンガ色の建物は上のドーム部分だけが鈍い金属の色になっている。近くで見るととんでもない大きさだ。

プロ野球のシーズンはあといくつか消化試合を残すだけで、福岡ドームでのホームゲームもウィークデーに一試合あるだけだった。とは言っても、ホークスには阪神との日本シリーズが控えている。当然、ドーム周辺にもそんな期待と緊張感のようなものが漂っている気がする。

そういえばテレビのニュースでシーズン優勝が決まった夜、中洲の橋の上で馬鹿騒ぎしていたファンが那珂川（なかがわ）にダイブしているところが流れていた。もし、日本一になったらやっぱり同じように人が飛ぶんだろう。野球やサッカーにはあまり興味がないので応援に熱狂するファン心理はいまいちピンとこないけど、喜んでるんだなというのは伝わってきた。

尤も、筋金入りのジャイアンツ党である父親はその様子を苦々しそうに見ていた。しょうがないだろ、悪いのはナベツネさ。
中には入れないので、ボクらは外の広々とした遊歩道をブラブラした。外周の植え込みの前には手の形をした色とりどりのモニュメントがある。
「何、あれ？」
「手形がくっついとうとよ。近くで見てみたら？」
そう言いながら、玲央自身は何となく近寄りたがらなかった。
理由はすぐに分かった。どのモニュメントにも握手をするような形のブロンズの立体手形とサインが取り付けてあるけど、モノによっては壁からいくつもの手がヌゥっと生えてるようにも見えてちょっと薄気味悪い。
「握手したことある？」
「猪木とだけね」
B，zの稲葉浩志とかダイエーの王監督の手形もあるのに、わざわざアントニオ猪木を選ぶ玲央のセレクトにボクは吹きだしそうになった。

そのまま隣のシーホークホテルに入って、亜熱帯の植物がいっぱいの吹き抜けのアトリウムで休憩することにした。そこはティーラウンジにもなっている。玲央はいつものようにコーヒー、ボクは見栄を張らずにオレンジジュースを頼んだ。
「結局、今日は空手の稽古はしなかったね」
「まぁ、いいっちゃないと。根つめたって一足飛びに上達せんしね」
「そうなんだけどさ」
「今日は休んだほうがいいって。しっかり泳いで身体動かしたっちゃし」
彼女の声には聞き分けの悪い子供に言い聞かせるような響きがあった。ボクをプールに誘ったのだって、きっと思い詰めがちなボクを心配してくれたからだ。

玲央が言うとおりなのは分かっている。それでも、ボクの胸の内にはどうしようもなく焦りがくすぶっている。

昼休みは玲央の課題――パンチを避けながら玲央の手を捕まえることをやって、そして火曜日からは放課後にも特訓をしていた。それとは別に姉貴を見張らなくていい日には道場での基礎もみっちりやった。

自分で言うのもなんだけど進歩はしてると思う。

最初は身体の芯がなくてきちんと構えて立っていることすらできなかった。ほんの少しステップを踏みながら手足を動かすだけで息が上がってしまっていた。それが今では基本的な足の運びも覚えたし、スタミナだってついてきた。突きも蹴りもそれなりに形になってきている。昨日、冗談半分に杉野の脚を蹴ってみたら自分でもビックリするほど小気味いい音がして、杉野をその場で悶絶させてしまった。

それなのに感じる焦りの正体。実はそれが何かは分かりきっていた。ゴールが見えないからだ。

もちろん、強くなることにゴールなんてない。ただ、ボクには姉貴をあいつから守れるようになるという当面の目的がある。なのに、そうなるのにどこまで強くなればいいのか、そういった目安がまるでない。

あいつがいつ、あの駅前の女の子にした暴力を姉貴に向けるか、それは分からない。ただ、そのときにもしボクがあいつに勝てるほど強くなっていなかったら――。

そう思うといても立ってもいられなくなる。これからでも、何でもいいから練習したくなる。

「やったらいっそのこと、こっちからあのヤンキーをボコボコにしに行けばいいやん。そのほうが手っ取り早かかもしれんし」

ボクが思いつくままにそう言うと、玲央は事も無げにそう言った。

それができればこんなにグジグジと悩んだりしない。口には出せないけど、あいつに向かって「姉貴に妙な真似をしたらただじゃお

かない」と啖呵を切るところをどれだけ妄想しただろう。
「……今のボクじゃ、それは無理だよ」
玲央はフンと鼻を鳴らした。
「じゃあ訊くけど、もし今夜、あいつと対決することになったらどうする？」
「……えっ？」
「ありえん話やなかよね。お母さんはおらんとやし、お父さんは当てにはならんって言いよったもんね。ねぇ、どうすると？　あいつに向かって「ボクはまだあんたに勝てないからもうちょっと待ってくれ」って頼むと？」
「それは……」
「いい加減に認めたら？」
「何を？」
「自分がどがんしようもない意気地なしってこと。ホントにお姉さんのことが大事やったら、自分が空手ができるとかできんとか、強いとか弱いとか、そがんと関係ないやん。相手が腕っ節が立つとやったらナイフでも金属バットでも用意すればよかやんね」
「でも、それじゃあ――」
「卑怯って？　あんた、馬鹿やないと？」
嘲るような口調。それに合わせるように玲央の目が獰猛な輝きを放っていた。
「相手はあんたが弱いけんってハンデとかくれんとよ？　そうやないでも、女の子を夜道で殴るような奴が正々堂々と勝負に応じるわけないやん。あんたが立ち向かったところで何人かでフクロにされて終わりって」
「それは――」
彼女の言う通りだった。玲央は乱暴な手つきでカップを取るとコーヒーを苦々しげに飲み干した。
「ケンカの強さっていろいろあるよ。もちろん技術的なところもあるし、身体のサイズ的なこともある。やっぱり身体が大きいってこ

とはそれだけで有利やけんね。でも、ケンカって最終的にはハートの強さの問題なんよ。もちろん、褒められたもんやないよ。アタシもくだらんって思ってる。ホントにそう思ってる。でも、やっぱり自分の意志を曲げるわけにはいかんとき、他人の横暴に屈するわけにはいかんときがあるとよ。普段は事なかれ主義でもよかよ。でも、争いが避けられんなら躊躇わずに拳を振り上げる。そして、相手がくたばるまで拳を振り下ろし続ける。そんなハートの強さがないといけんってアタシは思っとう」

「それがボクにはないっていうのかい？」

「まったくないとは言わんけどね。でも、あんたには何がなんでも勝つっていう気迫が決定的に足りんとよ。お姉さんを思う気持ちは嘘やなかろうけど、そのために他のモノを犠牲にしてもいいっていう覚悟がね。だから、一生懸命トレーニングして、自分を無理やり納得させたいと。違う？」

玲央はつまらなそうに「それじゃ勝てんよ」と付け加えた。

猛然と腹が立ってきた。ボクは思わず玲央を睨みつけていた。でも、同時に頭のどこかで自分を嘲るような笑い声が鳴り響いていた。

――なんだ、図星じゃないか。

「じゃあ、どうすればいいのさ？」

「最初に言うたやん。他の方法を考えたほうがいいって。あいつの素行の悪さを証明するとかさ。あれだけのヤンキーやもん、叩けばいくらでもホコリは出てくるって」

確かにそうだ。そのほうが何倍も確実だし、しかも効果的だ。わざわざ痛い目に遭う必要だってない。

「それにちゃんと外堀埋めてからやないと、どんだけ亮太が奮闘したってお姉さんの気持ちは変わらんっちゃないかな」

「……そうだね」

なんだ、やっぱりボクがやってたことは、ただの自己満足だったんじゃないか。

しばらくボクは黙っていた。玲央もジッとぼくを見つめるだけだ

った。
「じゃあ、どうしてこの一週間、ボクに付き合ってくれたんだい？
ボクが可哀そうだったから？」
玲央はゆっくりと首を横に振った。
「違うよ。亮太にどれだけの覚悟があるか、それが見たかったと」
「なるほどね。そして、ボクは試験に落ちたわけだ？」
玲央は何も言わなかった。
ボクは席を立った。これ以上、この場にいたくなかった。
「帰り、どうすると？」
「一人で帰れるよ。子供じゃないんだから」
目頭が熱くなるのを感じた。ボクはそれを必死にこらえた。腐ってもボクは男だ。女の子の前で泣くわけにはいかない。
でも、声が震えるのを止めることはできなかった。
財布から取り出した千円札をテーブルに置いて、ボクはティーラウンジを出た。一度も振り返ることなく。

11. 執念

西新(にしじん)まで歩いて市営地下鉄に乗った。中洲川端(なかすかわばた)で貝塚(かいづか)行きの空港線に乗り換える。地下鉄は貝塚で西鉄の宮地岳線と接続しているので、三苫まですんなり帰ることができた。

それでも予定よりはちょっと遅かった。ボクが家に着いたときには姉貴はすでに模試から帰ってきて、バイトに向かった後だった。

ボクは楽な格好に着替えて自分のベッドにひっくり返った。

正直、何もする気が起きなかった。

怒りはとっくに収まっていた。だいたい、ボクが怒る筋合いじゃなかった。最初から心のどこかで気づいていて、それでも、必死で目を背けてきたことをハッキリ指摘されたというだけの話だった。ボクが救いようのない馬鹿だったというだけの話だ。

首を回して時計を見た。午後六時ちょっと過ぎ。

姉貴がちゃんとバイトに行ってるかどうかの確認なんて、電話で済ませればいいことだ。わざわざコンビニまで行かなくたっていい。

実際のところ、姉のバイトの日に必ずコンビニに現れる弟のことはちょっとした噂になってるらしい。ボクは姉貴のことを心配してやってるつもりだけど、傍から見れば紛れもない家庭内ストーカーなこともちゃんと自覚してる。

ボクは家の電話の子機を手に取った。変声期は過ぎているので、声を押し殺せば父親のフリをしてもそんなに不自然じゃないはずだ。もし電話に出たのが姉貴ならそれはそれで目的は果たされるわけで、そのときは無言で電話を切ればいい。

（もしもし、私、ミウラハルカの家族の者ですが。はい、いつも娘がお世話になっております。仕事中に申し訳ないのですが、ちょっ

と伝えることがありまして。娘はもう、そちらにおりますでしょうか？）

そんな文面を思い浮かべて、あまりの馬鹿馬鹿しさに頭から追い払った。父親のフリをすれば、今度は父親に事情を話さなきゃならなくなる。そんなことができるんだったら、最初から両親に告げ口して終わらせてる。

ベッドから身体を起こして、出かけるために着替えを引っ張り出した。

姉貴はちゃんとコンビニにいた。我が姉ながら外面が異常に良いのでコンビニでの評価は悪くないらしい。その半分でも家でニコニコしてくれてれば姉弟ゲンカの回数だって減るのに。

いつもは店内にまで入るんだけど今日はそんな気にならなかった。外からしばらく様子を窺っただけで引き返すことにした。

すぐに帰る気にはならなかった。ボクはゆっくりペダルを漕いで大通りを流した。

先週の日曜日、玲央を送っていく途中に寄った公園に差し掛かった。ボクはその中にマウンテンバイクを乗り入れた。

キャッチボールをしている小学生の兄弟が一組と、数人でボールを追っているサッカー少年のグループがいる。それとカップルらしい高校生の二人連れ。

ボクはベンチに腰掛けてキャッチボールの兄弟をぼんやりと眺めた。

日は暮れかけていて、そろそろボールが見えなくなるはずだ。兄は弟に向かって「いい加減に帰ろうぜ」と言っている。だけど、弟はまだ帰りたがっていないようだ。グラブを叩いてボールを要求する。

弟はまだ野球を始めたばかりのようで、兄が投げるボールをお手玉したり、そのまますっぽ抜かしては後ろへ全力ダッシュしていた。

これが最後だぞ、という声と共にボールが飛んだ。弟は必死にそれを眼で追いながらキャッチしようとする。でも、夕暮れの薄暗がりの中ではボールは見えづらい。弟はオロオロと視線を彷徨わせた挙句、何と飛んできたボールを見事に額でキャッチした。

公園中に盛大な泣き声が響きわたった。

カップルの女の子が心配と笑いが入り混じった顔で隣の男に何か囁いている。まるで「うわあ、今の痛かったよねぇ」とでも言っているようだ。

それは違っていた。

痛かったから泣いてるんじゃなかった。悔しかったから泣いているのだ。その証拠に弟はグラブを足元の地面に叩きつけていた。

兄はやれやれといった感じで弟に近寄り、グラブをそっと拾って弟を宥めながら公園を後にした。それが合図だったようにカップルも腰を上げる。いつの間にかサッカー少年たちも姿を消していて、公園にいるのはボクだけになった。

ボクはその場でボーっとしたまま、どうして玲央が急にあんなことを言い出したのか、そのことをずっと考えていた。

自惚れるつもりはないけど、今日一日の様子だと玲央はボクのことを、少なくとも友だちだとは思ってくれている。それには確信がある。

なのに、玲央はその関係がぶち壊しになるのを分かった上で、あえてボクに厳しい言葉を浴びせかけた。

ボクのことが嫌いになったから？

ひょっとしたらそうかもしれない。でも、ボクが知っている玲央はそんなことはしない。愛想を尽かしたのなら相手にもしてくれないはずだ。

――いい加減に認めなさいよ。自分がどうしようもない意気地なしだって。

鋭利な刃物のような言葉が耳に甦る。
玲央が言うとおり、そろそろ認めるときだった。短時間では強くなれないことは分かっているのに、ボクは空手を習うことで「自分にやれることはやったんだ」と一人だけ納得する材料を作っていた。本当に立ち向かうべきことから目を背けて、自分の言い訳の中に逃げ込もうとしていた。ボクはさっきのキャッチボールの弟にも劣る意気地なしだった。
ふと、無意識に握っていた拳に視線を落とした。
さんざんうるさく言われたおかげで、自然に正しい握りができるようになっていた。肉の薄いゴツゴツと骨ばった拳だけど、手そのものは割と大きいし、自分ではそう思っていなかったけどボクは意外と骨太らしい。玲央も「当たったら痛いよね」と言ってくれた。
どうせそんなに何種類も覚えられないのと、短時間では手首を鍛えられないからと、彼女は正拳突きとは別にバックナックル――裏拳の練習を集中的にやらせた。
他に教えてくれたのは、相手の出足を止めるための膝への前蹴り――要するに蝶野のケンカキック――と基本中の基本の下段回し蹴り、そしてもう一つ、とんでもない必殺技だった。

＊　＊　＊

「亮太、必殺技、教えてあげよっか？」
一昨日の放課後の練習中、玲央は悪戯っぽく笑いながらそう言った。
何のことか分からないでいるボクにスタスタと近寄ってくると、玲央はボクの後頭部に手を回した。玲央の顔がボクの顔の目の前――吐息を感じられる距離まで迫ってくる。
えっ、なんだ？
次の瞬間、額のあたりで脳みそが揺れるような衝撃が炸裂した。
「いってえッ！！」

ボクは額を押さえてその場でのた打ち回った。
「必殺技って、頭突き！？」
「あ、馬鹿にしとうやろ。当たればかなり効くっちゃけんね」
確かに効いた。まだ目の奥で火花が散ってる気がする。ボクは痛みが治まるまでうずくまって、涼しい顔の玲央を見上げた。
「でもさ、これってかなり接近しないと使えないんじゃないか？」
「まぁね。でも、そんために相手の手を捕る練習しようとやん。ねぇ、亮太。ケンカで一番有効な技って何か知っとる？」
「クイズ？」
玲央は「真面目な質問」と言いながらしゃがみ込んで、ボクの額にデコピンを喰らわした。ボクはあまりの痛みに思わず「ヒッ！」と情けない声を上げてしまった。
「……なんだよ。金的蹴り？」
「それも強烈やけど、男の子にしか効かんやんね。正解は体当たり――別名、ぶちかまし。力士ケンカ最強説の根拠でもあるけど」
「えーっ！？」
「意外？」
「っていうか、ダサい」
「確かに」
玲央はカラカラと笑う。
「でも、この技――とも呼べんっちゃけど、これの怖いとこは小手先の技術じゃどうにもならんってとこたいね。組み技系はともかく、打撃系の格闘家には避ける以外の対処法がないけん」
「そうかも知れないけど、ボクみたいに身体が軽いと効かないだろ？」
「やけん、今の必殺技があるとよ。二、三発喰らう覚悟で身体ごとぶつかっていって、とにかく相手の身体に頭突きを喰らわす。うまく骨に当たったらめっちゃ痛いけんね。で、あとは指先をどっか身体の柔らかいところにめり込ませるとか、噛み付くとか。つねるっていうのも意外と効くかな」

「そこまでいくと、もはや格闘技じゃないね」
「プリミティブな攻撃が一番強いってこと。見栄えは悪かけどね」
玲央は不意に真面目な顔つきになった。
「だいたい、あんた、勝ち方にこだわってる余裕とかあると？　あんた、自分とお姉さんの二人を守らんといかんとよ？」

＊　＊　＊

なんだ、とっくにボクはケンカの心構えを諭されていたんじゃないか。
玲央は決して「勝つために手段を選ぶな」と言ってるわけじゃない。ただ、大切なものの前でつまらないプライドにこだわるなと言っているのだ。美しい敗北には自己満足以外の何の意味もない。どれだけ不様でも、どれだけ卑怯と罵られようと、絶対に勝たなきゃならない闘いがある。執念を燃やさなきゃならない時がある。
ボクの場合がそうだ。

12．逃亡

玲央はまだ家に帰っていなかった。彼女の名前が書かれた自転車は駐輪場にあったけど、あの真っ赤なバイクはなかった。

携帯電話も繋がらなかった。ボクのドコモと違って彼女の携帯電話はボーダフォンだ。意外と繋がらないところが多いと彼女自身がボヤいていた。

家の留守録にメッセージを残すのもはばかられたので、仕方なく引き上げることにした。その途中で杉野の家に寄った。

「おう、どうした？」

「おまえ、野球のバット持ってただろ。貸してくれないか？」

「よかけど、何に使う気や？　金属バットやけんロー・キックじゃ折れんぞ。栗原やったら分からんけど」

いや、いくら玲央でもそれは無理だ。

ちょっと素振りをしたくなっただけだと答えた。杉野はボクを家の裏のプレハブ倉庫に連れて行った。

「何本かあるばってん、どれがいいや？」

「一番ボロいのでいいよ。できたら、返さなくていいくらいのがあると助かる」

「へいへい。そうすっと俺が小学校のときに使うとった奴になるな。――えーっと、これなら返さんでいいぜ」

差し出されたのは見るからにジュニア用の短いバットだった。見るだけだと頼りない感じだけど、持ってみると手頃な長さと重さだった。重いバットを両手で振り回すより、取り回しのいいこっちのほうがいいかもしれない。

「サンキュー、恩にきるよ。持つべきものは友だちだな」

「馬鹿言え。貸しに決まっとうやろ」

礼は何がいいかという話で、杉野はクラスの某ルートから回ってきたＤＶＤのコピーを取ってくれと言った。こいつと数人の連れは「ホモサピエンスの生態研究映像」と称するＤＶＤ――テーマは交尾に限られている――をやりとりしている。
「なんだよ、エロＤＶＤか」
「やったらおまえに頼まんって。コピーガードは掛かっとらんけんな」
「ああ、そういうこと」
杉野が持ってきたのはちょっときわどい系のグラビアアイドルのＤＶＤだった。そんなことに自分のＰＣを使うのは気が進まないが贅沢は言っていられない。
オリジナルのディスクを預かって、ボクは杉野の家を後にしようとした。
「そう言えばさ、おまえってずっとこの辺に住んでんの？」
「ああ、俺んちはこん地に三代続く由緒正しい家系やけんな。見ろよ、こん立派なお屋敷を」
どう見ても建売住宅にしか見えないし、三代ってことは要するに祖父さん祖母さんと一緒に住んでるというだけのことだ。ホントにアホだな、こいつ。
「それがどげんかしたとや？」
「いや、だったら、この辺をウロウロしてるグロリアに乗ってるヤンキーを知らないかなって思って」
どんなグロリアかと訊かれたので覚えている限りの特徴を話した。今さらながらナンバーを控えておかなかった自分の迂闊さを呪いたかった。
しかし、杉野は面白がるように目を丸くするとヒュウと口笛を吹いた。
「知ってんのかよ？」
「知らんこつもなかな。地元じゃちょっととした有名人ったいね。コガマコトっていうんやけど」

「……どっかで聞いたような名前だな」
「国会議員とはコガの字が違ったっちゃないかな。名前は同じやけど。名前負けって言葉はそいつのためにあるって、兄貴の担任が言いよったらしかぜ」
「有名人っていうのはどういうことだよ？」
「呼んで字の如し。そいつ、ウチの上の兄貴の同級生っちゃけど、とにかくケンカがでたらめに強かったらしか。中学校んときからヤンキーの間で知らん者はおらんて言われるほどやったけんな。また、そいつが高校に行ってボクシング始めたら一年でいきなりインターハイでよかとこまでいったりしたもんやけん、さらに有名になったとさ」
やはりあいつはボクサーだった。玲央の見立てに間違いはなかったわけだ。
「その後は？　プロまで行ったとか？」
「いや、それが素行の悪さが目についたらしゅうて、ボクシング部は辞めさせられとる。基本的にあの世界てやんちゃな奴に寛容なはずなんやけど、そこでクビ言い渡されるってことは相当悪かったっちゃろうな」
「そのコガって奴の家、知ってる？」
「えーっと、雁ノ巣（がんのす）のほうだったはずやけど、詳しい場所までは。って言うか、おまえ、殴り込みかなんかする気か？」
ボクは思わず杉野の顔をマジマジと見た。
「どうしてそう思うのさ？」
「素振りって言うたけど、おまえ、それは凶器の持ち方やんか。右打者はバットは左手に持つもんぜ」
杉野に言われて気がついた。ボクはそのバットをまるで木刀のように右手で構えていた。
まだ、真っ正面からあいつとやりあうと決めたわけじゃない。玲央が言ったようにあいつの身辺を調べて追い込んでいったほうが安全で確実なことも事実だからだ。ただ、それとは別に、いつ何があ

ってもいいように準備をしておく必要はあった。
「ま、俺は別によかけどな。何かあったときには、そいつは道端で拾うたことにしてくれ。古いし、マジックで書いとった字もほとんど消えとるけん、それで通じるやろ」
「分かった。あと、他に何か知ってることないか？」
「さあな。もともと俺たちとは違う世界の住人やし。――あ、そう言えば兄貴がこん前、須崎埠頭のラブホテルの前で見たって言いよったっけ」
頭をぶん殴られたような衝撃だった。
「……それ、いつの話だ？」
「先週、いや、先々週の話。ほら、あがんとこに女の子運んでくワンボックスってあるやんか。その運転手のバイトしようらしかぜ」
「なんだ、そういうことか」
ホッと胸を撫で下ろす。職業差別をする気はないけど、あいつがまともな仕事をしていないことが分かって無性に腹が立った。そんな奴が女子高生にちょっかいなんか出すんじゃない。
「なんや、そっち絡みの話や？」
杉野の口調にいつもの勝手にストーリーを作り上げるときの予兆のようなものを感じた。こういうときは相手にしないに限る。
「そういうわけじゃない。ところでおまえの兄貴、そんなとこで何してたのさ？」
「俺に訊くなって。女の子をラブホに連れ込もうとして逃げられてふて腐れとったとか、弟の口から言えるわけないやん」
「言ってるって」
それ以上、杉野から役に立つ話は聞けそうになかった。ボクはもう一度、礼を言ってその場を後にした。

家に帰って、さっそく借りてきた金属バットを手にした。
持ち慣れないものを持っているせいか、ボクはやけに好戦的な気分になっていた。もしあいつが目の前にいたらこの場で殴りかかっ

てしまいそうだった。そうじゃなくても家を探し出して、あの霊柩車もどきのボンネットにこのバットを振り下ろしてやりたいとすら思う。

ただ、残念ながら事はそんなに単純じゃなかった。

いずれ対決は避けられないとしても、今のこの状況で行動に移せば、単に家庭内ストーカーの弟が姉の交際相手に襲い掛かったことにしかならない。何の解決にもならないばかりか、姉貴を余計に意固地にしてしまいかねなかった。ひょっとしたら親だって、相手への申し訳なさから強いことが言えなくなってしまうかもしれない。

もどかしさと歯がゆさで眩暈がしそうだった。今さらながら、玲央が言ったようにちゃんと外堀を埋めておかなかったことが悔やまれた。

気を紛らわすというわけでもなかったけど、とりあえず杉野と約束したＤＶＤのリッピングに取り掛かった。

杉野はかなりの技術が必要だと思っているようだけど、リッピングというのは実際には大したことじゃない。コピーガードのタイプに合った専用のソフトがあれば誰にでもできることだ。違法行為スレスレなので大きな声では言えないけど。

ソフトを起動してアイコンをクリックした。画面の中の小さなウィンドウに申し訳程度の面積を水着で覆ったアイドルの姿が映し出された。たぶん、ハワイかグアムあたりの海岸で波と戯れながら胸の谷間を強調したり、身体を不自然に捻ったグラビアでよく見るポーズをとっている。

ボクも健康な十五歳の男子なので、こういうのに興味がないと言えば嘘になる。けれど、ついでに自分の分もコピーしておこうという気にはならなかった。昼間に見た玲央の水着姿を重ねてしまいそうだったからだ。バレることはないけど、それはやっちゃいけないことのような気がした。

ＤＶＤが焼きあがるまでリビングでテレビを見ながら待つことに

したのはいいけど、プールで泳いだり慣れないバイクの後ろに乗ったりしたせいか、三〇分も見ないうちにボクはウトウトしていた。おかげで家の電話が鳴っているのをやりすごすところだった。
ナンバー・ディスプレイには番号しか表示されていなかった。〇九〇ということは携帯からだ。
「はい、三浦ですけど」
「春香いますか？」
トモコとかいう姉貴のクラスメイトだった。姉貴が使い過ぎで携帯電話を親に取り上げられていたときにこっちにかけてきていたので、何度か声を聞いたことがある。
「姉は今、バイトに行ってますけど？」
「えっ！？」
何故か、トモコは素っ頓狂な声をあげた。何かを取り繕うように彼女は「えー」だの「あー」だの意味不明の呻きを繰り返した。
「そのー、電話、繋がらんかったから……」
「バイト中は携帯は持ってないと思いますよ。何だったらコンビニの番号、教えましょうか？」
「あー、いえ、いいです」
そのままガチャンと電話は切られた。
リビングに戻った。眠気はすっかり去ってしまっていた。クイズ番組――改編期名物のやたら長いアレだ――はたいして面白くなかったのでチャンネルをＮＨＫに変えた。ちょうど八時四十五分のニュースが始まったところだった。
昼にたらふく鮨を食べたものの、そのあとは何も食べていなかったのでおなかが空いていた。
杉野の家からの帰りに買ってきておいた弁当を食べることにして、麦茶をグラスに注いだ。テレビの前に戻ると、昨日発表された巨人の原監督の辞任に伴う後任がどうとか、この時間に扱う意味がよく分からないニュースをやっていた。

――ちょっと待てよ？

いや、別に巨人の次期監督が堀内になることに異議があるわけじゃない――ボクはこの神経質そうなオッサンのことはまったく知らない。さっきのトモコからの電話のことだ。

すぐ近くに住んでいることもあって彼女と姉貴は仲がいい。その彼女が姉貴のバイト中に電話をかけたことがないなんてことがあるだろうか。

もちろん姉貴はバイト中は電話は取れないので、かけても出ないことは間違いない。しかし、だったら普通は「ああ、バイト中か」と思うだけで、家に電話をかけたりはしないはずだ。

単にトモコが忘れっぽくて、姉貴は今日はバイトだというのを失念しただけかもしれない。そして、電話が繋がらないのを電池切れだと思った可能性はある。

でも、それではさっきのトモコの慌てようの説明がつかなかった。さっきのあれは、まるでかけてはいけないところに電話をかけてしまって、でも、あんまり不審を招くような切り方ができなかった――そんな感じだった。

嫌な予感がした。何がというわけじゃないけど、辻褄の微妙な合わなさが引っかかる。

ボクは家の電話の番号登録から姉貴のバイト先の番号を呼び出した。幸い、父親のフリをするシミュレーションは済ませてあった。咳払いを何度かして低い声を出してみる。エー、ミウラハルカの父ですが。オーケー、ちゃんと出てる。

電話の呼び出し音が死刑執行のカウントダウンのように聞こえた。愛想のいい声のおじさんが電話に出た。ボクはシミュレーションどおりに姉貴と変わってくれと言った。

店長だというそのおじさんは切り出しにくそうに言った。

「えー、その、春香ちゃんは今日は具合が悪かけんって、八時ごろに早退したとですけどね……まだ、帰っとらんとですかね？」

くそッ、やっぱりだ。
「ああ、そうですか。そうですね……まだ帰ってないんですが、そこからなら時間もかかるでしょうし。途中でドラッグストアにでも寄ってるのかもしれませんね。どうも、娘がご迷惑をかけたようで――」
我ながらよくこれだけ口から出まかせが言えるもんだ。どう考えたってコンビニからウチまでは三〇分もかからないし、姉貴はいろいろと面倒なアレルギー持ちなので薬は病院で処方されたものと漢方薬しか飲まない。
店長さんは少し安心したように「ああ、ウチはいいんですが」と朗らかな声で言った。何に安心しているのか分かったもんじゃないけど、そこを追求している場合じゃなかった。ボクは適当なところで会話を切り上げて電話を切った。
すぐさま、自宅の電話から姉貴の携帯を鳴らしてみた。
ワンコール。ツーコール。そこでブツリと切れた。この切れ方からすると、姉貴はディスプレイの表示を見て着信拒否をしている。
すぐさま自分の携帯で呼び出してみる。今度は最初から繋がらなかった。ほんの一〇数秒の話なので設定を変えたわけじゃないだろう。姉貴はボクの携帯をあらかじめ着信拒否に設定している。つまり今夜、ボクからの電話を取らないつもりだったということだ。
間違いない。姉貴は最初からバイトを適当なところで切り上げて、とっとと夜遊びに出かけるつもりだったのだ。そして、その相手はあいつ――古閑しか考えられない。
ボクはまんまと出し抜かれたというわけだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2288y/

ブラジリアン・ハイキック　～天使の縦蹴り～

2011年11月9日15時01分発行